# 調 査 年 報 15

平 成 14 年 度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

# 調 査 年 報 15

平 成 14 年 度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

森町　倉知川右岸遺跡　縄文時代後期前葉の配石遺構

根室市　穂香竪穴群　縄文時代後期初頭の焼失竪穴住居跡

千歳市　オルイカ２遺跡　平地住居跡（アイヌ文化期　柱穴を紐でつないだ状況）

森町　森川３遺跡　近世の畑跡（調査区を横断する浅い溝が並ぶ）

# 目　　次

平成14年度の調査
1　調査の概要……1
2　調査遺跡……4
オルイカ１遺跡……4
オルイカ２遺跡……6
対雁２遺跡……10
浜厚真３遺跡……18
米原４遺跡……22
宮戸４遺跡……25
穂香竪穴群……28
白滝遺跡群……32
旧白滝８遺跡……34
旧白滝９遺跡……34
下白滝遺跡……34
白滝遺跡群の整理……40
濁川左岸遺跡……42
本茅部１遺跡……46
倉知川右岸遺跡……48
森川３遺跡……52
石倉１遺跡……54
野田生１遺跡……56
落部１遺跡……58
本内川右岸遺跡……59
キウス４遺跡……60
ユカンボシＣ15遺跡……62
西島松５遺跡……64
3　現地研修会の記録……66
現地研修会の概要……66
苫東埋文調査の顧末（佐藤一夫）……68
馬追丘陵における1960年前後の遺跡調査（野村　崇）……78
4　研修・研究会等……82
5　平成14年度資料の貸出……84
6　平成14年度刊行予定報告書……86
7　組織・機構……87
8　職員……88

# 北海道史略年表

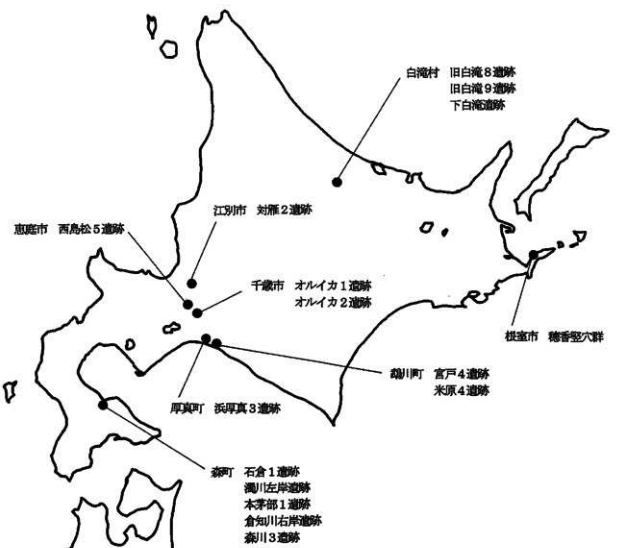
| 本州の時代区分 | 年代（西暦） | 北海道の時代区分 | 平成14年度調査遺跡の主な時期 |
|---|---|---|---|
| 明治～平成 | | （近代、現代） | |
| 江戸時代 | A.D.1900 | 近世 | |
| 室町時代 | A.D.1600 | 中世 アイヌ文化期 | オルイカ 1<br>オルイカ 2<br>森川 3 |
| 鎌倉時代 | A.D.1200 | | |
| 平安時代 | A.D.800 | 擦文時代 | 穂香竪穴群<br>宮戸 4<br>西島松 5 |
| 奈良時代 | | オホーツク文化期 | |
| 古墳時代 | A.D.400 | 続縄文時代 | 石倉 1 |
| 弥生時代 | | | 旧白滝 8 |
| 縄文時代 晩期 | B.C.300 | 縄文時代 晩期 | 穂香竪穴群<br>対雁 2、オルイカ 1、オルイカ 2<br>西島松 5 |
| 縄文時代 後期 | B.C.1000 | 後期 | 西島松 5<br>倉知川右岸<br>濁川左岸、宮戸 4、オルイカ 1 |
| 縄文時代 中期 | B.C.2000 | 中期 | 浜厚真 3、下白滝、穂香竪穴群<br>宮戸 4、米原 4、オルイカ 2、西島松 5 |
| 縄文時代 前期 | B.C.3000 | 前期 | 本茅部 1、濁川左岸、倉知川右岸<br>森川 3 |
| 縄文時代 早期 | B.C.4000 | 早期 | 宮戸 4、西島松 5<br>宮戸 4、浜厚真 3<br>穂香竪穴群 |
| 縄文時代 草創期 | B.C.7000 | 草創期 | |
| 旧石器時代 | B.C.10000<br>B.C.12000<br>B.C.20000<br>B.C.30000 | 旧石器時代 | オルイカ 2 |

**アイヌ文化期**　平地住居跡がオルイカ１遺跡（1)、オルイカ２遺跡（7）で検出されている。オルイカ２遺跡では、焼土を伴う住居（チセ）のまわりに杭列が想定されるところもある。さらに柱穴の分布状態を見ると倉庫（プ)、小熊の檻（ヘペレセッ)、便所（アシンル）なども推定可能かと思われる。

倉知川右岸遺跡で「溜め糞？」とあるのは、駒ケ岳火山灰ｄ層よりも下層から出土した、小動物の骨片を多く含む灰白色のものである。同じく駒ケ岳火山灰ｄ層よりも下層から検出されたものに森川３遺跡の畑跡がある。調査区のほぼ全面に検出されており、16世紀前後の時期を推定している。

**継続整理・報告書作成**

平成10年度に発掘を終了し、整理を進めてきたキウス４遺跡、ユカンボシＣ15遺跡の作業は、最終年度である。キウス４遺跡は10冊目、ユカンボシＣ15遺跡は６冊目の報告書を刊行することになる。野田生１遺跡、落部１遺跡、本内川右岸遺跡は前年度に発掘を終えたものである。対雁２遺跡、西島松５遺跡、白滝遺跡群については、それぞれ膨大な資料群の整理が今後とも継続されることとなる。



## 2　調査遺跡

**オルイカ１遺跡（A－03－88）**

事 業 名：一般国道337号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：北海道開発局札幌開発建設部
所 在 地：千歳市中央2530－５・６、2533－３・４
調査面積：5,460m²
発掘期間：平成14年５月７日～10月25日
調 査 員：佐川俊一、末光正卓、冨永勝也

**遺跡の概要**

遺跡は、千歳市街の北東約5.5km、馬追丘陵の西側の麓、千歳川水系により形成された上位段丘（現地表標高約13m）上に立地する。調査区の北東を河川改修されたオルイカ川が流れている。かつては「キウス13号周堤墓」として周知されていたが、平成13年に北海道教育委員会が行った試掘調査の結果、周堤墓が存在しないことが明らかとなり、「オルイカ１遺跡」という名称に変更された。

この試掘調査で、本遺跡のオルイカ川左岸部分は、発掘調査部分（3,900m²）と工事立会部分（２ヵ所　合計1,560m²）に分けられた。発掘調査の早い段階で、工事立会の部分も遺構・遺物の存在が確認されたので、これらも合わせて発掘調査を行うことになり、最終的に調査面積は5,460m²となった。調査区は大まかに南東から北西側に大きく傾斜しており、北西側（低地部）は現地表から約１m掘り下げると水が湧く。東側は土層の状態から大きく削平されたと考えられる。

**遺構と遺物**

遺構・遺物は、いずれも樽前ｃ降下軽石層（Ⅳ層）の上位の「Ⅲ層」、下位の「Ⅴ層」と呼称した黒色土から多く確認された。Ⅴ層下位の漸移層（Ⅵ層）出土の遺物は少ない。

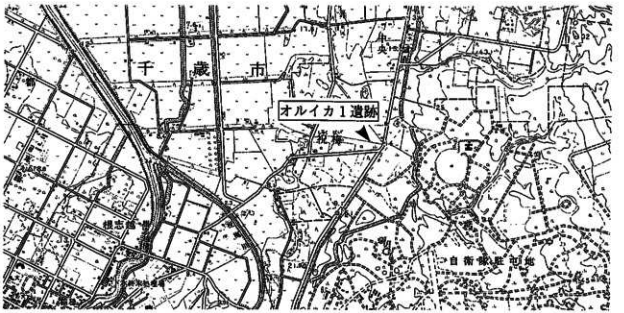
Ⅲ層の主な遺構としては、アイヌ文化期の平地住居跡（USD－1）が１軒確認され、鉄器や礫類が出土した。包含層出土の遺物は、すべて縄文時代晩期後半のものである。Ⅲ層の遺構・遺物は、調査区の南側にしか存在しなかった。

Ⅴ層では縄文時代の竪穴住居跡（LPD－1～6）や土坑等が確認された。住居跡は、余市・タプコプ式の土器片を用いた土器囲い炉をもつもの（LPD－1・4～6）と、炭化材が多量にみられたもの（LPD－2・3）がある。後者は、現在のところ明確な時期は不明である。包含層出土の遺物は、縄文時代後期初頭が主体的で、他の時期の遺物は極めて少ない。多くが低地部以外からの出土である。

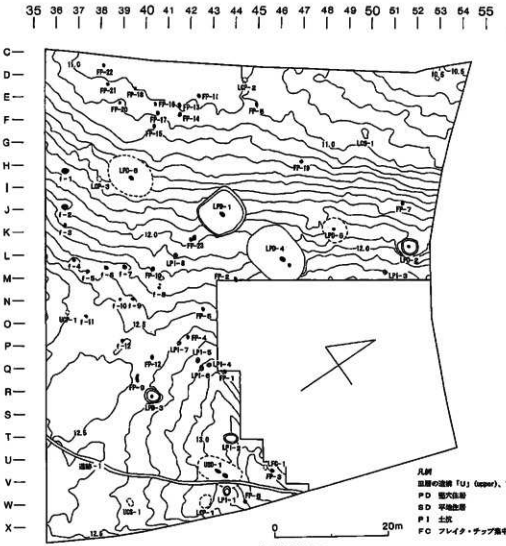
詳細な集計作業は行っていないが、現時点での遺物の出土点数は、土器12,885点、剥片石器群3,688点、磨製石器群110点、礫石器群1,191点、その他（鉄器等）11点である。

道跡１確認状況（南から）

竪穴住居跡（LPD－2）炭化材確認状況




遺跡位置図（この図は国土地理院発行5万分の1地形図「恵庭」を使用したものである）




遺構位置図

**オルイカ２遺跡（A－03－280）**

事 業 名：一般国道337号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：北海道開発局札幌開発建設部
所 在 地：千歳市中央2536
調査面積：3,230m²
発掘期間：平成14年６月24日～10月25日
調 査 員：佐川俊一、和泉田毅、阿部明義

**遺跡の概要**

遺跡は千歳市街地から北東に約６km、オルイカ１遺跡の北東約400m、馬追丘陵裾部にある。調査区は標高12～15mほどの緩斜面上にあり、地層に大きな変化はないが、下位の層位で風倒木などが多い。主な遺構と遺物は下記の通りで、特にアイヌ文化期の住居群（コタン）の跡がうかがえる遺跡である。また、札滑型細石刃核を含む白滝産黒曜石の旧石器ブロックが検出された遺跡でもある。

**遺構と遺物**

遺構は平地住居跡７軒、建物跡３棟、杭列４、単独の柱穴16基、焼土21ヵ所（以上アイヌ文化期）、竪穴住居跡１軒、土壙４基、Ｔピット８基、焼土84ヵ所（以上縄文時代）を検出した。平地住居（チセ）跡には、20cm程度の厚みをもった炉があり、焼土と灰が重なっている。その周囲から柱穴が10～30本検出されている。建物跡はやや太い柱穴で構成されており、倉庫などを想定している。

遺物は土器等10,259点、石器等8,631点、金属製品12点、合計18,902点出土した。遺跡出土土器の主体時期は中期半ば（萩ヶ岡２式～天神山式）で、中期後半～後期初頭（北筒式～余市式）、晩期後葉（タンネトウＬ式）も多く、その他に早期後半の土器が少数出土している。石器等では、鍾石や火打石と考えられるアイヌ文化期の小礫が約100点、白滝産とみられる茶色味の強い黒曜石が主体の旧石器遺物が約750点のほか、縄文晩期の所産とみられる大型の黒曜石原石などが出土した。旧石器時代の遺物は札滑型細石刃核３点、細石刃100点以上、彫刻刀形石器や掻器が少数出土した。黒曜石原石は長さ30～35cm、重さ2.5kg前後の角柱状のものが２本並んで出土した。金属製品は刀子などの鉄製品と銅片が出土した。また漆器が出土したが、赤漆の塗膜のみが残っていた。このほかアイヌ文化期を主体に獣骨・魚骨・炭化材などの自然遺物も出土している。




オルイカ２遺跡と周辺の遺跡




オルイカ２遺跡の主な遺構と遺物

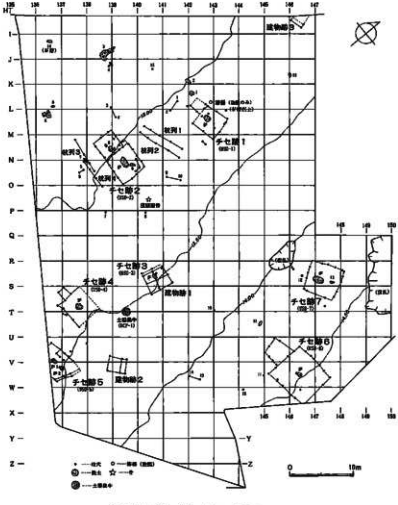
**アイヌ文化期の遺構と遺物**
チセ跡７軒・建物跡３棟・杭列４列
鉄製品・鐔（拵石など）・具・骨片ほか

**縄文時代晩期の遺物**
大型の黒曜石原石・掻器（敲磨）・玉ほか

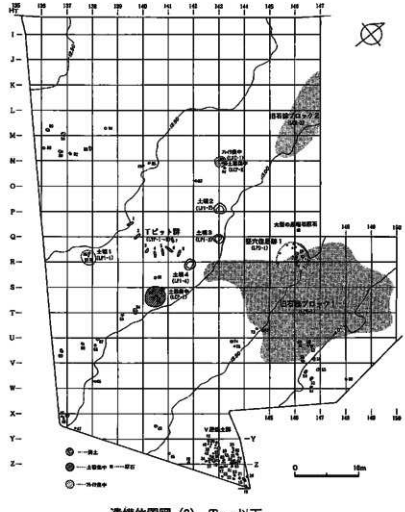
**縄文時代の遺構と遺物（主に中期）**
竪穴住居１軒・土壙４基・Ｔピット８基・
焼土群・土器集中・フレイヤップ編中
三角形土製品ほか

**旧石器時代の遺構**
札滑型細石刃核３点・細石刃・彫刻・
掻器ほか

基本土層




遺構位置図 (1) Ta-c以上
※地形はⅢ層上面




遺構位置図 (2) Ta-c以下
※地形はⅦ層上面

## 対雁（ついしかり）2遺跡（A－02－110）

事 業 名：石狩川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道開発局石狩川開発建設部

所 在 地：江別市工栄町地先（石狩川河川敷緑地内）

調査面積：3,450m²（昨年度下層部分1,500m²、今年度着手部分1,950m²）

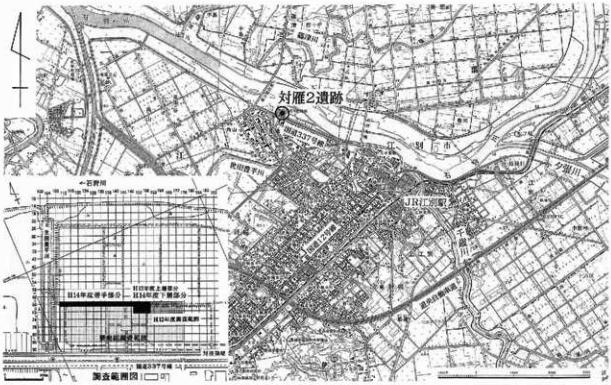
発掘期間：平成14年5月7日～10月31日

調 査 員：鈴木　信、西脇対名夫、吉田裕吏洋、酒井秀治

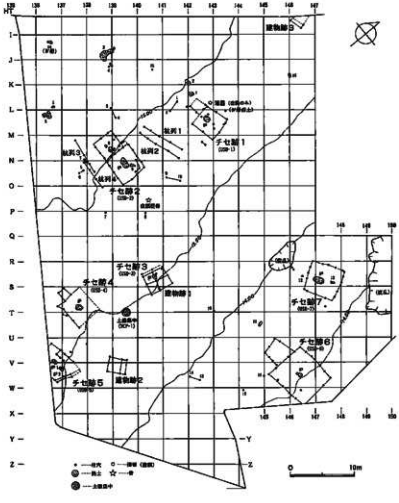
**遺跡の概要**

遺跡はJR江別駅の北西約4kmの石狩川左岸に位置する。世田豊平川（旧豊平川）との合流地点よりも上流側の石狩川河川敷緑地内であり、標高約8mの自然堤防上の微高地に立地する。調査以前に運動公園の造成に伴う均平化を受けている。石狩川の河川改修が本格化する1970年代以前は対雁番屋、樺太アイヌ強制移住地、対雁小学校、榎本牧場などが所在した旧対雁村の中心部がこの付近にあり、江別の歴史を語る上で欠かせない重要な地域である。

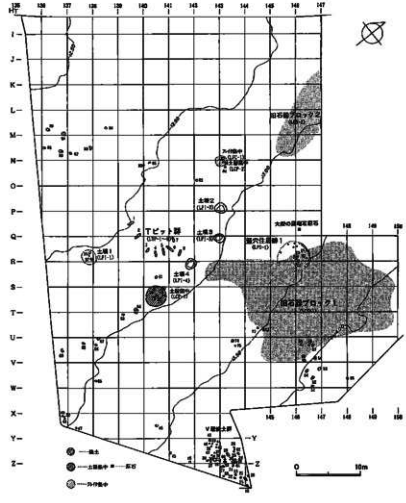
遺跡調査の4ヵ年目にあたる。今年度は昨年度調査区の下層部分1,500m²と今年度着手部分として遺跡の北側部分1,950m²（195m×10m）、合計3,450m²の調査を行った。今年度着手部分については遺跡の要発掘面積が西側に拡がったことおよび昨年の調査によって層位が見直されたことから東西方向の層位確定と遺構・遺物の分布の確認を目的として調査を行った。遺物包含層は世田豊平川（旧豊平川）へ向かって落ち込んでいき、現地表面から約2.5m下の標高6m付近まで洗掘を免れた生活面が検出されている。また、地層確認のための深堀りでは標高2～4m付近の低い位置から土器片や石器等が少量出土している。13年度着手範囲の遺物は縄文晩期後葉のものであるが、今年度着手範囲においては続縄文土器が少量出土している。遺跡は縄文晩期後半～続縄文後半にかけて形成されたと考えられる。



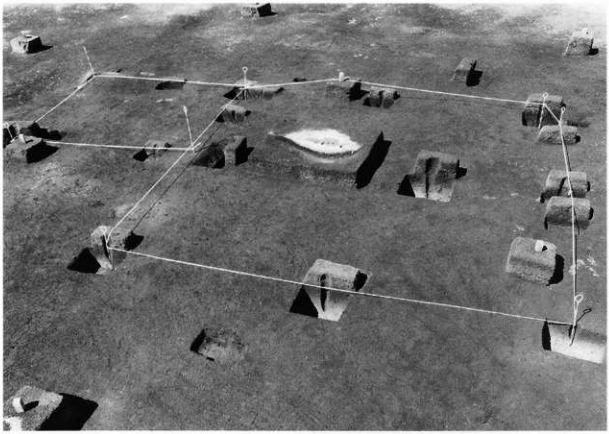

遺跡の位置



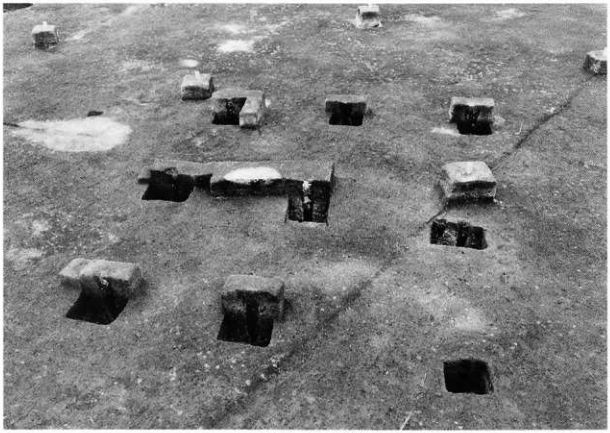

遺構位置図 (1) Ta-c以上
※地形はⅢ層上面




遺構位置図 (2) Ta-c以下
※地形はⅦ層上面



平地住居跡（アイヌ文化期）



建物跡（アイヌ文化期）

大型の黒曜石原石出土状況

竪穴住居跡（縄文時代中期）

旧石器出土状況（ブロック１）

札滑型細石刃核出土状況

彫器出土状況

## 対雁（ついしかり）2遺跡（A－02－110）

事 業 名：石狩川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道開発局石狩川開発建設部

所 在 地：江別市工栄町地先（石狩川河川敷緑地内）

調査面積：3,450m²（昨年度下層部分1,500m²、今年度着手部分1,950m²）

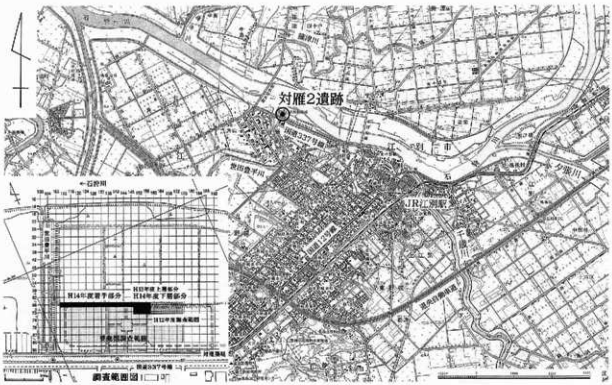
発掘期間：平成14年5月7日～10月31日

調 査 員：鈴木　信、西脇対名夫、吉田裕吏洋、酒井秀治

### 遺跡の概要

遺跡はJR江別駅の北西約4kmの石狩川左岸に位置する。世田豊平川(旧豊平川)との合流地点よりも上流側の石狩川河川敷緑地内であり、標高約8mの自然堤防上の微高地に立地する。調査以前に運動公園の造成に伴う均平化を受けている。石狩川の河川改修が本格化する1970年代以前は対雁番屋、樺太アイヌ強制移住地、対雁小学校、榎本牧場などが所在した旧対雁村の中心部がこの付近にあり、江別の歴史を語る上で欠かせない重要な地域である。

遺跡調査の4ヵ年目にあたる。今年度は昨年度調査区の下層部分1,500m²と今年度着手部分として遺跡の北側部分1,950m²（195m×10m）、合計3,450m²の調査を行った。今年度着手部分については遺跡の要発掘面積が西側に拡がったことおよび昨年の調査によって層位が見直されたことから東西方向の層位確定と遺構・遺物の分布の確認を目的として調査を行った。遺物包含層は世田豊平川(旧豊平川)へ向かって落ち込んでいき、現地表面から約2.5m下の標高6m付近まで洗掘を免れた生活面が検出されている。また、地層確認のための深掘りでは標高2～4m付近の低い位置から土器片や石器等が少量出土している。13年度着手範囲の遺物は縄文晩期後葉のものであるが、今年度着手範囲においては続縄文土器が少量出土している。遺跡は縄文晩期後半～続縄文後半にかけて形成されたと考えられる。



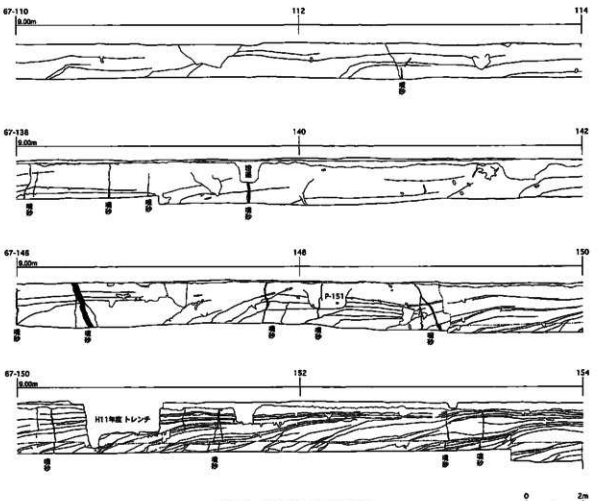

遺跡の位置

**遺構と遺物**

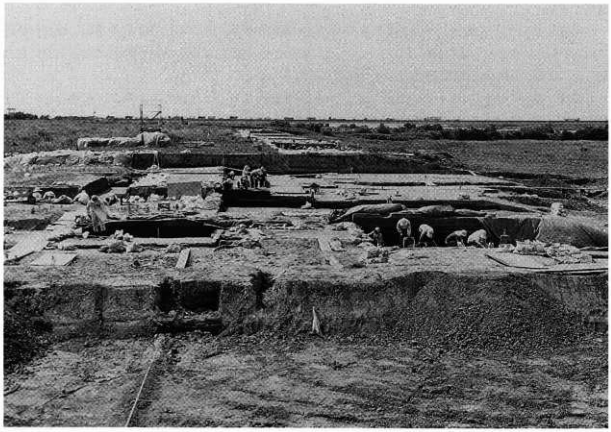
昨年度調査区の下層部分では引き続き多くの遺構・遺物が検出されたが、今年度着手した遺跡の西側では148ライン付近の土坑や140～146ライン付近に焼土が多く見られるほかは、焼土が点在するだけであった。また、遺物は昨年度調査区に比べ非常に少なかった。

今年度に検出された遺構は土坑33基、焼土246ヵ所、集石３ヵ所などである。平成11年度のトレンチ調査・平成13年度の上層部分の調査で検出したものを含めると、土坑135基、焼土795ヵ所、集石11ヵ所などとなる。土坑は礫・礫石器や砂の混入した灰白色の粘土が入っているものがあったが、多くは遺物を伴わない。明確に墓坑と判断されるものはなかった。形状は円形や楕円形、規模は直径1.7m・深さ0.6mほどの大型のものから直径0.2m・深さ0.1mほどの小型のものが検出された。土坑は南北方向に分布が拡がり、146・156・158ライン付近に集まって検出される傾向が観察されている。焼土は炭化物や骨片などを伴うものや廃棄されたようなものが検出された。また、焼土の周囲に土器を据えるためと考えられる浅い小穴を伴うものも検出された。

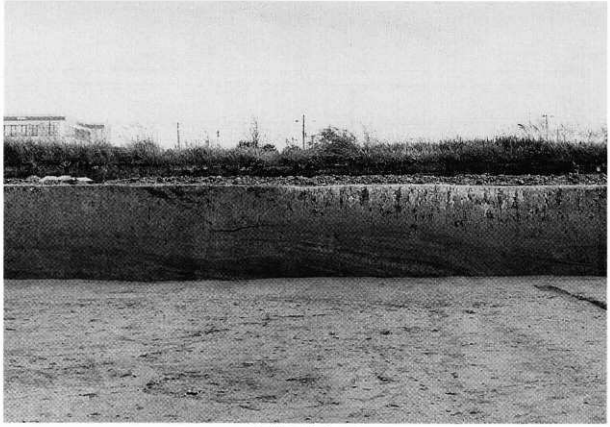
今年度に出土した遺物は平成14年末現在の集計で土器等2,916点、石器等9,952点、合計12,868点である。平成11・13年度の出土品を含めた今年度報告範囲の遺物総数は土器等34,015点、石器等20,042点、合計54,057点となる。土器は縄文晩期後半～続縄文後半に属するものである。石器は石鏃、スクレイパー、たたき石・台石が多く、ナイフ、石斧などが少量出土している。石器等の石材としては、剝片石器が黒曜石、礫石器では安山岩や砂岩が多い。



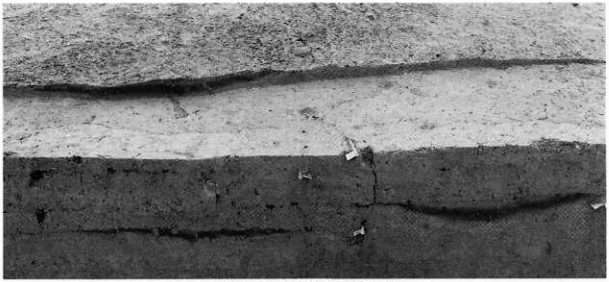

東西方向土層断面図（抜粋）



調査風景（南東から）



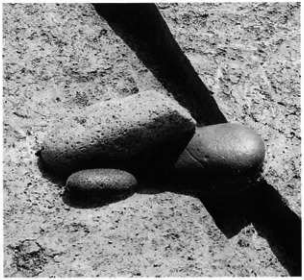
地層断面（南東から）



F－914・919・922断面（北東から）

P－138・139・140調査風景（南西から）

P－123断面（南東から）



S－20検出状況（北から）

**土器集中１の整理作業について**

土器集中１はＶ群ｃ類土器・石器・炭化物・焼獣魚骨片が大量に集積されていた。調査は平成11～12年度にかけて行われ、今年度から整理を開始した。遺物の内訳は土器片68,075点、焼成粘土塊１点、石器・石器類5,954点、フローテーション済み資料９箱（サンコーサンボックス＃36－2B）である。なお、復元土器のごく一部が平成11年度『江別市　対雁２遺跡(1)』に報告済みである。

土器は破片接合、石膏復元（2002年10月30日現在、約90個体復元了、深鉢約60個体・浅鉢約30個体）、復元土器台帳製作、擬口縁観察とその細部撮影、接合関係の把握（垂直方向・水平方向）と垂直分布図・水平分布図の作成を行う。また、擬口縁の形成に関して奈良文化財研究所　深澤芳樹氏の指導を受けた。以下に遺構図と土器図の一部を掲載し、これまで得られた知見を述べる。

**土器集中１とは**

本遺構はⅡ－1層上面で検出されたが、Ⅱ－1層は耕作・河川緑地造成によって約１m削平を受けているので、本来はⅡ－1層下部に位置する遺構である。１～７層に分層される。堆積断面を見ると南北方向はほぼ水平に堆積している。上部は遺物を含む１・２層、遺物をほとんど含まない３層（Ⅱ－1層）、下部は５層という層序である。東西方向は南北方向に較べて複雑な堆積を示している。上部は遺物を含む１・２層、遺物をほとんど含まない３・４層（Ⅱ－1層）、下部は５～７層という層序である。

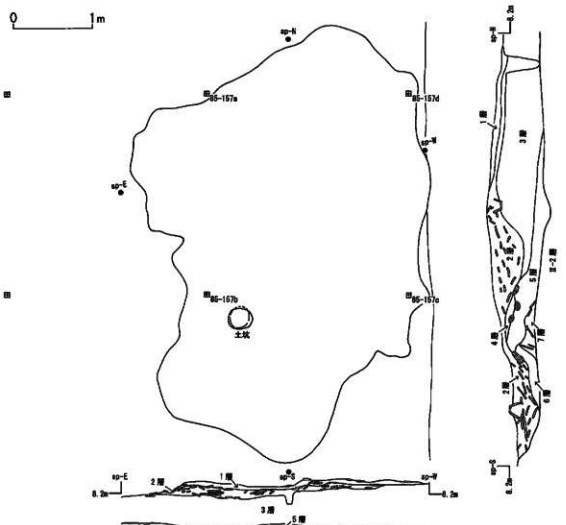



図３　土器集中１

**土器について**

〈胎土〉土器集中１の土器の胎土はほとんどが「1」：石英・長石・角閃石と径１mm以下の泥岩・軽石を含む胎土であり、それに風化の著しい泥岩粒（被熱すると赤褐色に発色する）や土器片・繊維？を加えるものがあった。「2」：石英・長石角閃石・軽石を多く含む非常に粗い胎土は２個体のみである。

〈成形〉粘土紐接合面は外傾である。

〈口縁～胴部の形態〉倒円錐台形の器形は、深鉢（器高：口径＝１：1.25＞）、鉢（器高：口径＝１：1.25～1.50）、浅鉢（器高：口径＝１：1.50＜）。倒円錐台形以外の器形は壷、広口壷、台付鉢、舟形土器がある。深鉢は口縁部に対して底部が傾きをもつために自立しない個体が多い。また、器高30cm以上の個体は口縁部上面観が楕円形に歪むものが多い。

〈底部の形態〉凸平底の底径は７cm未満の小さい個体が多い。平底の底径は９cm以上あって、凸平底に較べやや大きい。

〈調整〉深鉢・鉢・浅鉢の外面は弱いナデ。内面はタテナデ→ヨコナデ、外面よりも強いナデで、ナデ幅が明瞭に観察できる。壷の内面調整は鉢類に較べて粗い調整である。

〈施文方法〉ほとんどが直描き文である。有文深鉢は下地を整える手順を踏まず、縄文の上から施文される。体部上半に屈曲部をもつ有文鉢・浅鉢は縄文をナデ消して描く直描き文の個体がある。

〈文様〉主文様には平行沈線文の他に、弧沈線文（交互弧沈線、並列弧沈線、対向弧沈線）、三角形沈線文（交互三角形沈線、並列三角形沈線、対向三角形沈線、背反三角形沈線があり、並列三角形沈線・交互三角形沈線・対向三角形沈線は「交点」をネガ部・管状刺突で表現する）、菱形沈線（並列菱形沈線）がある。分断文様は集合する蛇行線文がある。副文様には短沈線・短弧沈線がある。

〈胴部の縄文〉胴部に施される縄文原体はRLの原体が多い。回転方向は斜位縦走が多い。縄文押捺の単元は施文幅がやや広く転写距離が比較的短い。また、口縁部に幅狭の横位斜走、それより下部にやや幅広の斜位縦走がみられる個体もある。

〈底部の文様〉深鉢底部に施される文様はRL縄文とナデがある。凸平底にはRL縄文、平底にはナデが施される個体が多い。

〈二次被熱〉器高30cm以下深鉢は胴部1/2下半～全面に赤色化が見られる。器高30cm以上の深鉢は胴部1/3下半赤色化が見られ、器高35cm以上の深鉢にはさらに外底辺から上方５cmのあたりに幅１～２cmの黒色化帯が胴部をめぐる個体がある。この黒色体は炭化物の付着ではなく、器体内部に及んで（断面でいうと内外面の中間部）内面側器壁には及んでいない。

**石器等について**

剝片石器は凹基の三角鏃、スクレーパー、ナイフなどがあり、礫石器は石斧、たたき石がある。そのほかには硯状片・石炭がある。

**土器集中１の時期**

出土した土器から縄文時代晩期後葉の後半にあたる。変形工字文由来の三角形沈線文があることから大洞A´式に並行し、菱形沈線文の取り扱いによっては砂沢式にも並行する可能性がある。

鈴木信「道央部における晩期後葉の土器編年」『江別市　対雁２遺跡(3)』（北海道埋蔵文化財センター　2002）の時期分類に当てはめればⅤ・Ⅵ期である。Ⅳ・Ⅴ期が主体の土器集中３はA.M.S.を用いた補正 $^{14}$C年代測定で2500±40yB.P.～2430±40yB.P.と測定されているので、土器集中１はそれよりも新しい測定値が予想される。

いづれにしても当該期の資料は少なく、土器集中１のように出土量が多く一括性が高い資料はない。慎重な取り扱いが必要である。この遺構の時間の幅を明らかにするのが当面の課題である。

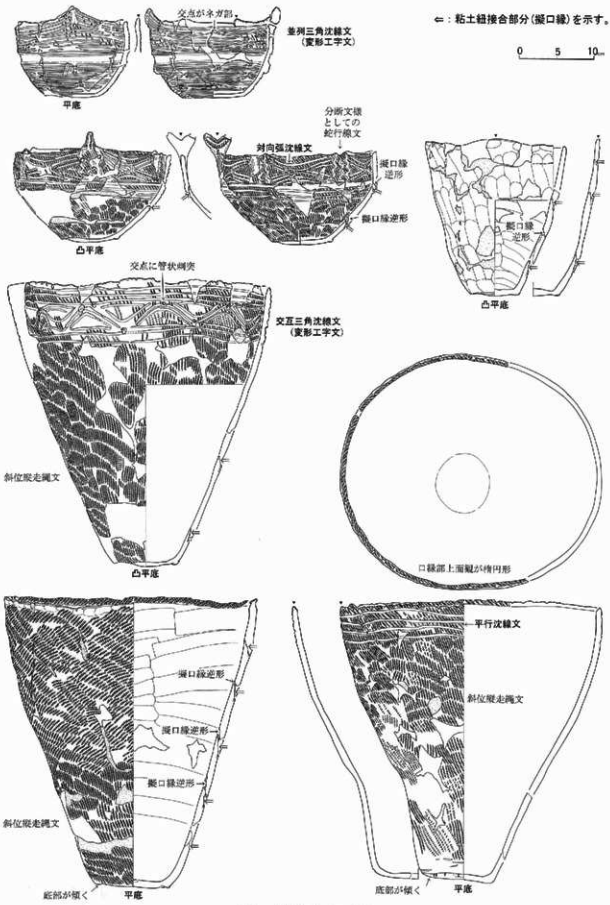
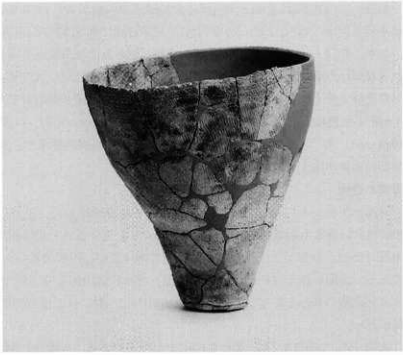
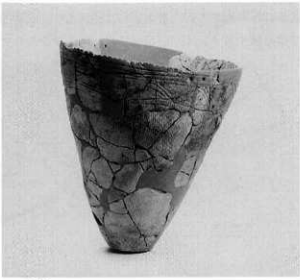

⇦：粘土紐接合部分（擬口縁）を示す。
0 5 10cm
交点が不ガ詳
並列三角沈線文
（変形工字文）
平底
分断文様
としての
紐行線文
対向弧沈線文
擬口縁
逆形
擬口縁逆形
凸平底
擬口縁
逆形
凸平底
交点に管状痕突
交互三角沈線文
（変形工字文）
斜位擬走縄文
凸平底
口縁部上面凹が楕円形
擬口縁逆形
擬口縁逆形
擬口縁逆形
斜位擬走縄文
底部が傾く
平底
平行沈線文
斜位擬走縄文
底部が傾く
平底

図4　土器集中1の土器





土器集中１の土器

## 浜厚真3遺跡（J－13－72）

事 業 名：日高自動車道厚真門別道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部

所 在 地：勇払郡厚真町字浜厚真525番地－3ほか

調査面積：3,390m²

発掘期間：平成14年7月29日～10月25日

調 査 員：遠藤香澄、鎌田　望、中田裕香、笠原　興、芝田直人、山中文雄

### 遺跡の概要

遺跡は厚真町の南西部、浜厚真地区にある。現海岸線から2km程内陸の台地縁辺部（標高4～12m程）に位置する。今回の発掘調査によって、173基のTピットが検出された。

調査区内の地形は、北側と南西側に台地縁辺の斜面があり、その鞍部から北側の斜面を巻くように、ほぼ平坦な面が広がる。Tピットの多くはこの平坦な面で検出された。南東側は泥炭の堆積する低湿地である。

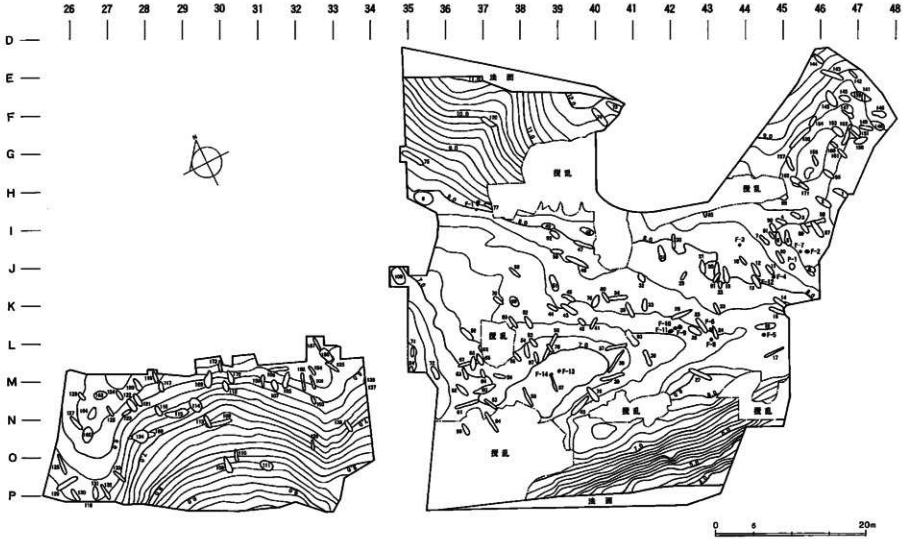
基本土層（Ⅰ～Ⅹ）のうち、遺構・遺物に関わるのはⅢ層とⅤ層の黒色埴壌土である。両層間にみられるⅣ層は土壌化した樽前ｃ火山灰の可能性がある。Ⅲ層には白頭山－苫小牧火山灰が斑状に堆積し、その上位で焼土1ヵ所が検出された。Ⅴ層は南西側斜面と平坦面でⅤa、Ⅴb、Ⅴcの3層に分層された。Ⅴa層は黒色壌土で、Tピットを掘り込んだ層とみられる。Ⅴb層は褐色砂壌土で、支笏降下軽石（Spfa－1）の二次堆積層の可能性が高い。Ⅴc層は黒褐色壌土で、焼土13ヵ所が検出された。縄文時代早期の遺物が出土している。

### 遺構と遺物

遺構はTピット173基、土坑1基、焼土14ヵ所を検出した。Tピット（TP1～173）は、溝状、楕円形、杭穴のあるもの等があり、厚真川を挟んで位置する「苫東遺跡群」で報告された形態がみられる。土坑（P－1）はTピットと似た確認状況であったが、円形で浅いためTピットと認定しなかったものである。Ⅲ層の焼土（F－1）は、白頭山－苫小牧火山灰より上位で検出したことから、擦文時代～アイヌ文化期のものであろう。Ⅴc層の焼土（F－2～14）は、層位や周囲の遺物から縄文時代早期の可能性が高い。

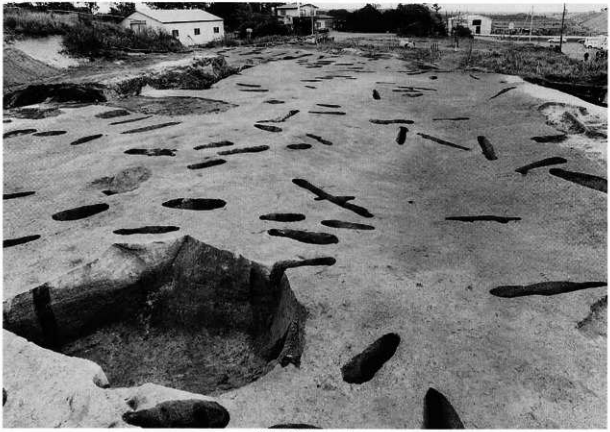
遺物は約3,000点で、Ⅴc層からの出土が大半である。土器は1,000点程で、その多くは縄文時代早期の東釧路Ⅱ式に相当する。その他の東釧路式系や、縄文時代後期前葉・末葉、同晩期前葉、続縄文時代後半のものもあるが、数点ずつに過ぎない。石器等は黒曜石のフレイク・チップが多い。定型的な石器では石鏃やスクレイパーが目に付く。石斧やたたき石、すり石等はごく僅かである。

遺跡位置図


26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
0
5
20m

遺構位置図

遺跡遠景（南西から）



遺跡完掘（西から）

TP－82断面（東から）

TP－99完掘（南から）

TP－97完掘（南から）

TP－88完掘（西から）

TP－170杭跡断面（南西から）

## 米原（よねはら）4遺跡（J－14－42）

事 業 名：日高自動車道厚真門別道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部

所 在 地：勇払郡鵡川町字米原400－5ほか

調査面積：975m²

発掘期間：平成14年5月7日～7月26日

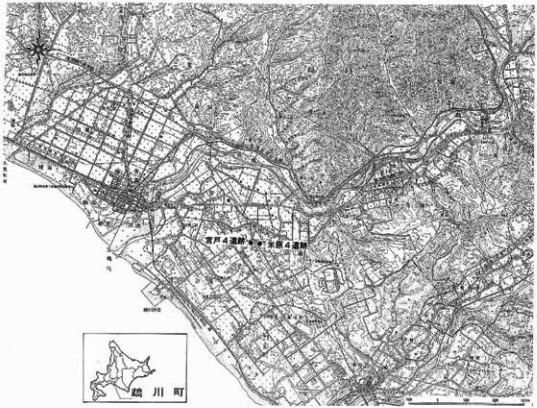
調 査 員：遠藤香澄、鎌田　望、中田裕香、笠原　興、芝田直人、山中文雄

### 遺跡の概要

遺跡はJR鵡川駅の東南約5kmに位置する。一級河川鵡川の支流であるイモッペ川の両岸、標高15～30mほどの河岸段丘とそれに続く氾濫原に立地している。右岸が米原4遺跡、左岸が宮戸4遺跡である。この地域の遺跡調査は平成12年度に始まり、今年度は3ヵ年目である。

米原4遺跡は、平成12年度に町道米原1号の北側をA地区、南側をB地区として計2,311m²を調査した。遺構は、縄文時代中期後半、柏木川式期の住居跡6軒のほか、土壙4基、Tピット7基、焼土13ヵ所、石囲い炉1ヵ所が検出された。調査結果は『鵡川町　米原3遺跡・宮戸3遺跡・米原4遺跡』（北埋調報153）で報告済みである。

今年度、米原4遺跡は平成12年度調査範囲（B地区）の周縁を調査した。当初の計画では、イモッペ川を臨むクリアランス部分（400m²）、昨年度に道教委文化課の試掘により包蔵地と判明した北東側の町道米原11線下と牧草地（1,200m²）の計1,600m²を調査する予定であった。しかし、調査中に工事計画の変更により町道下部分が範囲から除外され、最終的な調査面積は975m²となった。




遺跡位置図

この図は国土地理院発行の地形図、1：50,000「富川」（NK－54－9－13、昭和63年3月30日発行）と、鵡川町役場の1：50,000「鵡川町全図」（承認番号　平10，道複　第874号）を合成したものである。

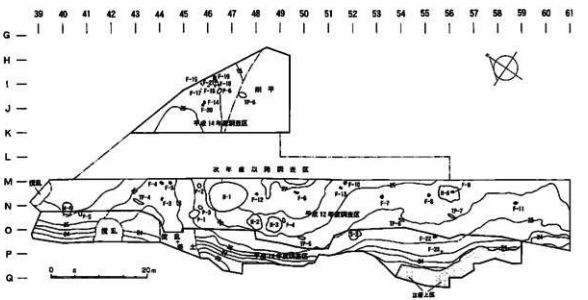
平成14年度は、米原４・宮戸４遺跡の本年度調査分と、これまで未報告であった平成12年度の宮戸４遺跡Ｓ地点調査分を併せて、『米原４遺跡(2)・宮戸４遺跡(2)』として報告する。

基本土層は両遺跡で共通しており、地表面から、Ⅰ：表土・耕作土、Ⅱ：樽前ａ、樽前ｂおよび有珠ｂ降下火山灰、Ⅲ：黒色腐植土（局地的に白頭山－苫小牧火山灰を含む）、Ⅳ：褐色土（一部は土壌化した樽前ｃ降下火山灰）、Ⅴ：黒褐色腐植土、Ⅵ：漸移層、Ⅶ：支笏降下軽石の風化ローム、Ⅷ：支笏降下軽石または円礫層となっている。遺物包含層は主にⅢ～Ⅴ層およびⅥ層の上面である。

**遺構と遺物**

今年度、住居跡１軒、土壙２基、Ｔピット１基、焼土９ヵ所、集石１ヵ所が検出された。住居跡は平成12年度に検出されたＨ－4の南西側未調査部分である。床面より集中して出土し、報告書に掲載した復元土器と同一個体の土器片が得られた。平成12年度出土分と接合して、改めて今年度報告する予定である。これらの遺物から、Ｈ－4は縄文時代中期後半、柏木川式期の遺構と考えられる。また、平成12年度検出のＨ－5は、今年度の調査の結果、風倒木痕を誤認したものであることが判明した。このため、Ｈ－5は欠番となり、現在のところ米原４遺跡で検出された住居跡は５軒ということになる。TP－8は、これまで検出されたものが沢地形内部に立地するのとは異なり、尾根の高い部分に掘り込まれている。焼土は上面に土器片やフレイクなどの遺物や炭化物を伴うものが多い。集石には被熱した礫・礫片が含まれている。

遺物は土器約3,000点、石器等約4,400点、合計で約7,400点が出土した。これらの大部分は、イモッペ川へ向かう沢筋より出土している。土器は、縄文時代早期後半の東釧路Ⅲ式、コッタロ式、中茶路式、東釧路Ⅳ式、同前期前半の綱文式、同前期後半の植苗式、同中期前半の円筒上層式、同中期後半の天神山式、柏木川式、北筒式、同後期前葉の余市式、タプコプ式、同晩期末葉～続縄文時代初頭の可能性のある土器などが出土した。このうち最も多いのが中期後半の土器である。石器等もこれらの時期の所産と考えられる。礫・礫片が大半を占めており、黒曜石製のフレイクが次ぐ。定型的な石器は少ないが、石鏃、石槍・ナイフ、石錐、つまみ付ナイフ、スクレイパー、石斧、すり石、砥石などが出土した。全体的な傾向として礫石器が少なく、特にたたき石や台石は出土していない。




米原４遺跡　遺構位置図

遺跡遠景（南から）

H－4（東から）

S－2（東から）

H－4遺物出土状況（東から）

TP－8（北東から）

## 宮戸（みやと）4遺跡（J－14－40）

事　業　名：日高自動車道厚真門別道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査
委　託　者：国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部
所　在　地：勇払郡鵡川町字宮戸180－1、字米原404ほか
調査面積：4,550m²
発掘期間：平成14年5月7日～8月28日
調　査　員：遠藤香澄、鎌田　望、中田裕香、笠原　興、芝田直人、山中文雄

### 遺跡の概要

宮戸4遺跡は平成12年度、町道米原1号の南側（S地点）、600m²を調査した。平成13年度は、町道米原2線に接した斜面部分およびイモッペ川の改修区域の計5,310m²を調査した。昨年度調査分は『鵡川町　宮戸4遺跡』（北埋調報168）として報告した。昨年度までに、遺跡全体で住居跡1軒、Tピット18基、焼土26ヵ所、フレイク・チップ1ヵ所、集石1ヵ所が検出されている。

今年度は、S地点の平成12年度調査範囲に接する部分（1,200m²）、北側の平成13年度調査範囲に挟まれた町道米原2線下と水田部分（3,500m²）、および北側の樹林部分（1,300m²）の計6,000m²を調査する予定であった。しかし、調査中に工事計画の変更がなされ、町道米原2線現道下と樹林部分が調査範囲より除外された。このため最終的な調査面積は4,550m²となった。

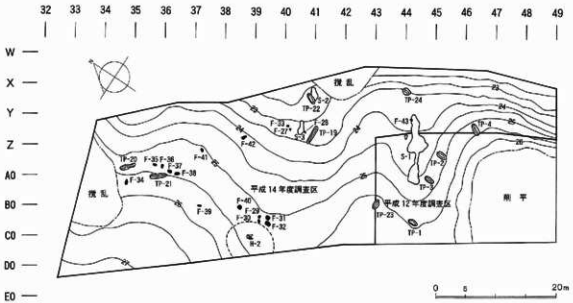
### 遺構と遺物

遺構は住居跡1軒、Tピット8基、焼土19ヵ所、集石4ヵ所を検出した。これらの大部分はS地点に存在する。住居跡（H－2）は掘り込みが明瞭ではなく、土器囲い炉と柱穴のみが検出された。使用されている土器は、縄文時代後期前葉のタプコプ式に相当する時期のもので、5個体分の破片が浅く掘り窪めた穴の壁面に貼り付けるようにして廻っている。炉の内側は非常に強く焼けており、黒曜石製の石槍1点のほか、多量のフレイク・チップが出土した。Tピットは昨年度まで検出のものと同様に沢地形を意識して作られている。焼土は大部分がⅤ層下位～Ⅵ層上面で検出されており、周辺の包含層出土の遺物から、縄文時代前期前半の時期に形成されたものが多いと考えられる。集石は平成12年度検出のS－1の続きを調査した。大半の礫・礫片が被熱している。また、イモッペ川の旧河道が水田部分で確認された。上部の堆積状況などから、縄文時代後～晩期のころまでの河道と推測される。

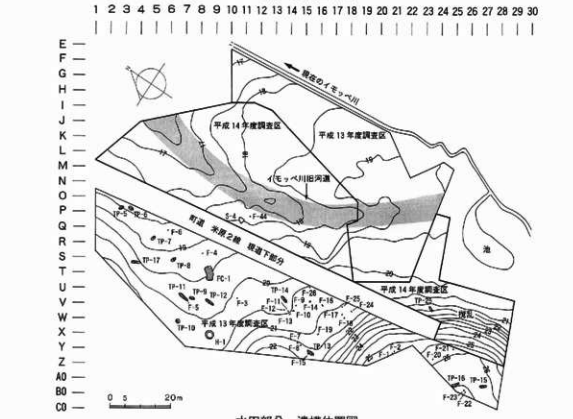
遺物は、土器約12,800点、石器等約15,500点の計約28,300点が出土した。このうち約70%がS地点よ

年度別調査範囲と周辺の地形

り出土している。土器は縄文時代早期後半の東釧路系、同前期前半の綱文式、静内中野式、同中期後半の天神山式、柏木川式、北筒式、同後期前葉の余市式、タプコプ式、同晩期後葉のタンネトウL式、擦文時代のものが出土している。このうち最も多いのは、縄文時代前期前半の土器群で、早期後半のものが次ぐ。石器等は黒・礫片が約50%、フレイク・チップが約40%を占める。定型的な石器は非常に少ないが、石鏃、つまみ付ナイフ、スクレイパーの多い点が注目される。また、蛇紋岩製と考えられる勾玉1点が、水田部分で出土した。



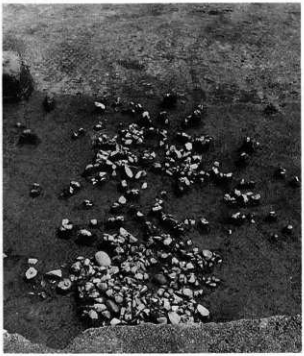

S地点　遺構位置図



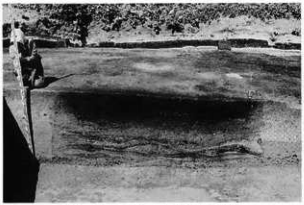

水田部分　遺構位置図

イモッペ川旧河道調査風景（南から）

H－2土器囲い炉（南から）



S－1（南西から）



TP－21セクション（南西から）

勾玉出土状況（西から）

## 穂香（ほにおいかほかな）竪穴群（N－01－34）

事 業 名：一般国道44号根室道路工事に伴う穂香竪穴群発掘調査

委 託 者：国土交通省北海道開発局釧路開発建設部

所 在 地：根室市穂香175ほか

調査面積：7,150m²

発掘期間：平成14年5月7日～10月31日

調 査 員：越田雅司、愛場和人、広田良成

**遺跡の概要**

穂香竪穴群は根室市中心部から南西に約5km、第二ホニオイ川左岸の標高9～13mの西から東に張り出した舌状台地上にある。遺跡の北約500mには根室湾がひろがり、気象条件がよいと知床半島や国後島を望むことができる。調査前の状況は牧草地と笹原の原野で、擦文時代などの遺構と考えられる凹みが地表面で確認できた。周辺には第二ホニオイ川支流の対岸に穂香3竪穴群、南西の海岸段丘に幌茂尻東竪穴群、幌茂尻ポントマリ竪穴群があり、市街地方向へ1.5km程行った台地上に国指定史跡西月ヶ岡竪穴群がある。平成5年度の根室市教育委員会の発掘調査では5軒の竪穴が発見され、同時に行われた竪穴の分布調査では遺跡全体で62ヵ所の凹みが確認された。当センターの調査区は遺跡の西側にあたり、昨年は8,000m²、今年度は7,150m²の調査を行った。昨年度の調査では擦文時代と考えられる60点を超えるガラス玉、ヒスイ製勾玉、金属製品がまとまって出土し、口縁部突起に動物意匠がついた北筒式土器がみつかり、話題になった。

基本土層はⅠ層：表土、耕作土、Ⅱ層：黒色土、主に擦文時代の遺物包含層、Ⅲ層：黒褐色土、主に縄文時代の遺物包含層、Ⅳ層：黄褐色土、摩周火山起源の火山灰（Ma－g～k）、約7,000年前降下、Ⅴ層：黒色土、縄文時代早期以前の遺物包含層、Ⅵ層：黄褐色ローム層（盛土はこの層を主体とした土で形成される）である。

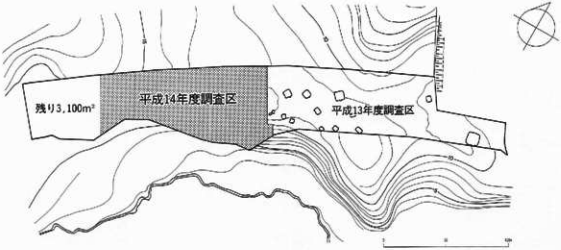
**遺構と遺物**　（　）内は平成13・14年度合計

今年度の調査で確認された擦文時代の遺構は、竪穴住居跡13（26）軒、土坑1ヵ所、焼土5（9）ヵ所、集石1（2）ヵ所で、時期は擦文時代の終わり頃と考えられる。竪穴住居跡は正方形でカマドと炉を有するタイプ①と、長方形で炉のみがみられるタイプ②がある。①では大型（長径7～8m）と、小型（長径4～5m）のものがあるが、いずれもカマドが東壁に作られる。②では周溝が床面壁際にめぐる例がみられた。竪穴内の遺物は若干の擦文式土器、鉄製品のほか、H－26以外で1～3ヵ所の集石が確認された。

縄文時代の遺構は竪穴住居跡11軒、土坑20（22）基、盛土10ヵ所、焼土1ヵ所で、時期は中期末～後期初頭と考えられる。

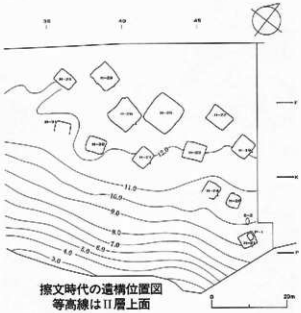
竪穴住居は平面形が長円形・卵形・不整形とバリエーションがあり、長円形の比較的掘り込みが浅い3軒が炭化材をともなう焼失住居であった。また平面形が不整形となる掘り込みの深い竪穴住居跡がある。土壙には形状的には住居と変わらない不整形のものがみられたほか、ベンガラ層？が壙底近くにみられる墓の可能性が高いものがあった。盛土は黄褐色土（Ⅵ層）を主体とした土がⅢ層中にまとまってみられた場所で、遺物の集中、焼土、炭化材が伴うものがある。遺物は北筒Ⅱ・Ⅲ式土器、石鏃、石槍、スクレイパー、石錘、砥石、フレイクなどが比較的まとまって出土している。盛土の1つでは獣骨が出土している。

出土遺物は擦文時代・縄文時代中期末～後期のものがほとんどだが、縄文時代早期の石器や続縄文時代の土器が若干出土している。なお次年度も継続予定（3,100m²）である。

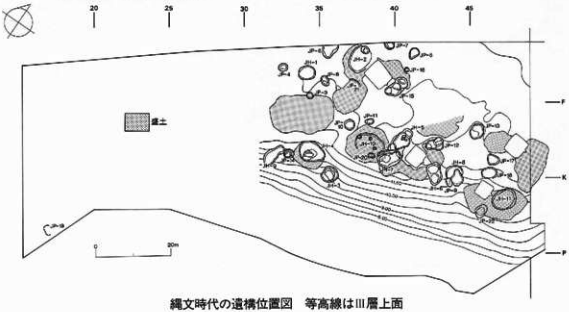



調査範囲図

遺跡の位置と周辺の竪穴群



撚文時代の遺構位置図
等高線はⅡ層上面




縄文時代の遺構位置図　等高線はⅢ層上面

調査風景（手前H－26・奥H－25）

周溝のある擦文住居（H－23）

集石の出土状況（H－28）

カマド検出状況（H－24）

焼失住居の調査（JH－1）

JH－1床面出土の土器

炭化材出土状況（JH－2）

土坑の完掘（JP－15）

盛土の土層断面（JM－1）

## 白滝遺跡群

事 業 名：一般国道450号白滝丸瀬布道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：国土交通省北海道開発局網走開発建設部

発掘期間：平成14年6月3日～10月25日

調 査 員：長沼　孝、鈴木宏行、立田　理、直江康雄

**調査遺跡一覧**

| 遺跡名（道教委登載番号） | 所在地 | 調査面積(m²) |
|---|---|---|
| 旧白滝8遺跡(Ⅰ－20－31) | 紋別郡白滝村字旧白滝442 | 2,610 |
| 旧白滝9遺跡(Ⅰ－20－32) | 紋別郡白滝村字旧白滝438 | 3,380 |
| 下白滝遺跡(Ⅰ－20－23) | 紋別郡白滝村字下白滝99－1 | 2,250 |
| | 合計 | 8,240 |

**整理遺跡一覧**

| 遺跡名（道教委登載番号） | 所在地 | 遺物点数(点) |
|---|---|---|
| 奥白滝11遺跡(Ⅰ－20－65) | 紋別郡白滝村字上白滝62－2 | 2,376 |
| 服部台2遺跡(Ⅰ－20－13) | 紋別郡白滝村字奥白滝18－3 | 798,030 |
| 奥白滝1遺跡(Ⅰ－20－50)＊ | 紋別郡白滝村字上白滝183－2、183－5 | 182,921 |
| 上白滝8遺跡(Ⅰ－20－91) | 紋別郡白滝村字上白滝181－4、182－2、182－3 | 1,349,748 |
| 上白滝6遺跡(Ⅰ－20－89)＊＊ | 紋別郡白滝村字上白滝123 | 1,600 |
| 白滝第30地点(Ⅰ－20－6) | 紋別郡白滝村字白滝382－4 | 4,267 |
| 白滝8遺跡(Ⅰ－20－58) | 紋別郡白滝村字白滝146－1、2 | 4,036 |
| 白滝18遺跡(Ⅰ－20－92) | 紋別郡白滝村字白滝145、139 | 47,853 |
| 白滝3遺跡(Ⅰ－20－36) | 紋別郡白滝村字白滝106外 | 41,281 |
| 旧白滝8遺跡(Ⅰ－20－31) | 紋別郡白滝村字旧白滝442 | 未集計 |
| 旧白滝9遺跡(Ⅰ－20－32) | 紋別郡白滝村字旧白滝438 | 未集計 |
| 下白滝遺跡(Ⅰ－20－23) | 紋別郡白滝村字下白滝99－1 | 156,514 |
| | 合計 | 2,588,626 |

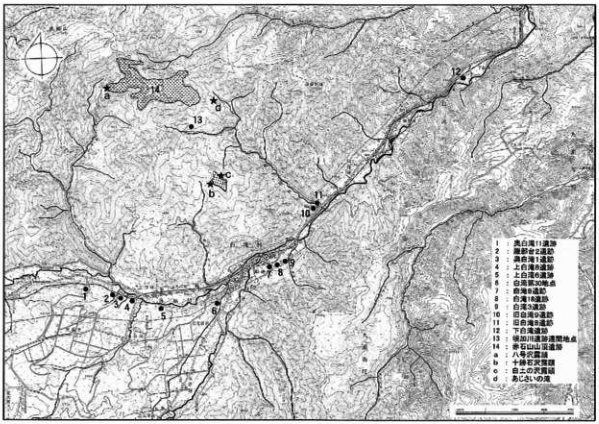
＊　平成12年度調査分
＊＊　平成13年度調査分

### 平成14年度調査の概要

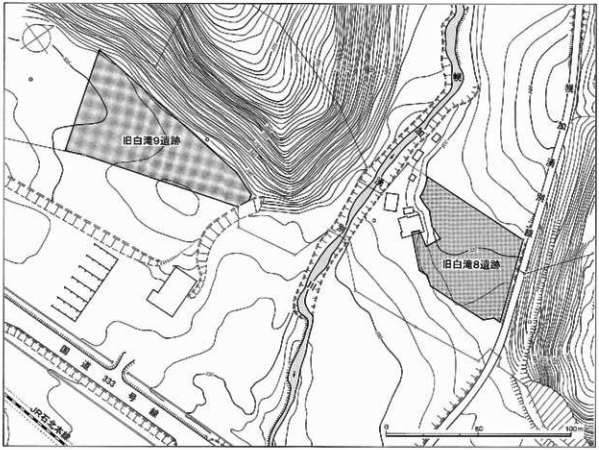
白滝村は、北海道の屋根といわれる大雪山系の東北山麓にあり、市街地の北西約6kmには国内有数の黒曜石産地として知られる赤石山がある。村内を東西に流れる湧別川とその支流の支湧別川の河岸段丘上には旧石器時代の遺跡が多数所在し、それらは白滝遺跡群と総称されている。特に、赤石山に通じる八号沢川と湧別川との合流点付近には、白滝第13地点をはじめ、服部台、白滝第32地点、白滝第33地点など、学史的に有名な遺跡が集中している。また、1997年には新たに約20万m²が国指定遺跡に追加され、すでに指定済みの「白滝遺跡」（白滝第13地点遺跡）と合わせて「白滝遺跡群」として名称変更された。

今年度の調査はその史跡白滝遺跡群より湧別川をさらに下り、支湧別川との合流点より下流の地域で行った。調査した3ヵ所の遺跡は全て河岸段丘上にあるが、調査地点は大きく2ヵ所に分かれている。一方は赤石山南東側の幌加湧別川と湧別川との合流点付近にある旧白滝8・9遺跡、他方はその合流点からさらに湧別川を6kmほど下り、丸瀬布町との境界近くに位置する下白滝遺跡である。なお、下白滝遺跡は昨年度からの継続調査である。

以下各遺跡の詳細な位置および地形、また出土遺物の概要を説明する。




赤石山（原石山）と遺跡の位置




旧白滝８・９遺跡　調査範囲図

**旧白滝８遺跡の調査**

遺跡は、白滝市街から北東へ約3.4km、幌加湧別川と湧別川との合流点を約400mさかのぼった幌加湧別川左岸に位置する。調査区は標高約340m、地形は幌加湧別川に向かってゆるやかに傾斜する斜面が大部分であるが、幌加湧別川の浸食を受けた急斜面とそれに続く平坦面も一部みられる。調査区は全面にわたって後世の耕作や宅地の造成による撹乱を受けているため、包含層はほとんど残存していないが、前述した斜面とそれに続く平坦面では縄文時代の包含層が残っている部分があった。

土層は幌加湧別川および湧別川の河川堆積物、また調査区の北東方向に延びる沢の崖錐堆積物が複雑に堆積し、見極めは困難であったが、以下のように大まかに分層した。

Ⅰ層＝耕作撹乱層　Ⅰa層＝黒褐色土（包含層）　Ⅰb層＝暗褐色土（包含層）　Ⅱa層＝黄褐色粘土　Ⅱb層＝黒褐色土　Ⅱc層＝黄褐色砂混粘土　Ⅲ層＝砂層　Ⅳ層＝砂礫層　Ⅴ層＝礫層

遺構は焼土３ヵ所、フレイク・チップ集中域が14ヵ所検出されている。ほとんどが幌加湧別川旧河道に沿ったⅠb層上面で検出されおり、同一層から出土している土器から、縄文時代のものと考えられる。

遺物は主にⅠ層から出土しているが、Ⅲ層中からも２ヵ所のフレイク・チップの集中域が確認されたほか、若干の遺物が出土している。また、風倒木や木根等に伴う自然の落ち込みから大量の遺物が出土している。土器は最も多いものが縄文時代後北$C_1$式に相当するもの約40点、ほかにわずかではあるが早期とみられるものも出土している。石器は同時期とみられる石鏃、削器、両面加工ナイフおよびその製作途中とみられる両面調整石器が多く出土し、ほかに石核、剝片・砕片など、石器製作に関わる遺物も多量に出土している。

**旧白滝９遺跡の調査**

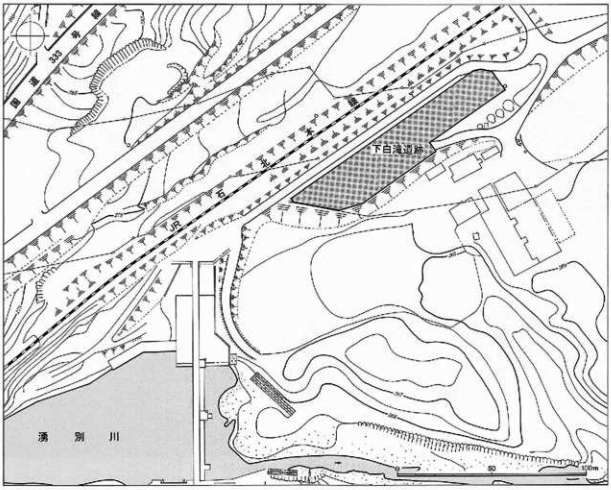
遺跡は、旧白滝８遺跡の幌加湧別川を挟んだ対岸に位置する。調査区は幌加湧別川の右岸にあり、標高は約340m、地形は比較的平坦ではあるが湧別川に向かって緩やかに傾斜している。調査区は後世の耕作により著しく撹乱され、包含層は残存していない。遺物は耕作土中からのみ出土し、全て石器類で、定形的なものとしては若干の石鏃、尖頭器（石槍・ナイフを含む）、削器等がある。

遺跡の時期は石器の風化度合いや器種などから縄文時代と考えられるが、土器が出土していないため、詳細は不明である。

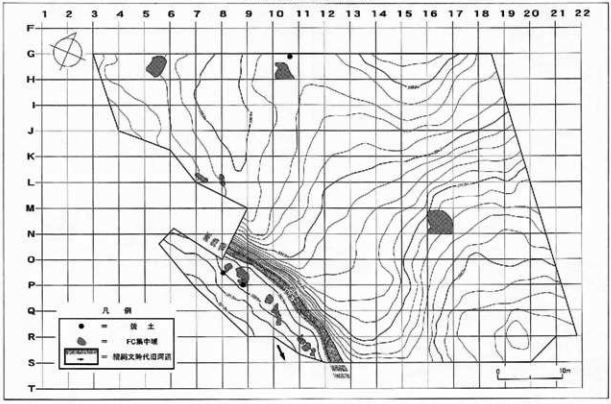
**下白滝遺跡の調査**

遺跡は、白滝市街の北東約9.5km、村名の由来となった「白滝」の下流500m、湧別川左岸の標高約270mの河岸段丘上に位置する。

調査区は全体に耕作が行われ、包含層は残存していない。遺物は耕作土中から多く出土したが、風倒木や木根などの自然撹乱中からも出土している。土器は47点出土し、縄文時代中期の押型・押引文土器に伴うとみられる無文の土器がやや多く、ほかに後・晩期とみられるものが少量ある。石器は石鏃、尖頭器（石槍・ナイフを含む）、つまみ付きナイフ、削器などの定形的なもののほか、製作途中とみられる調整のある剝片や剝片・砕片が多く出土している。




下白滝遺跡　調査範囲図



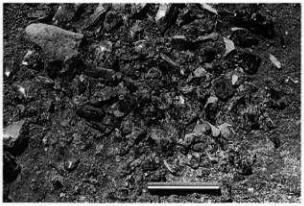

旧白滝８遺跡　遺構位置図

旧白滝８　調査状況（北西から）

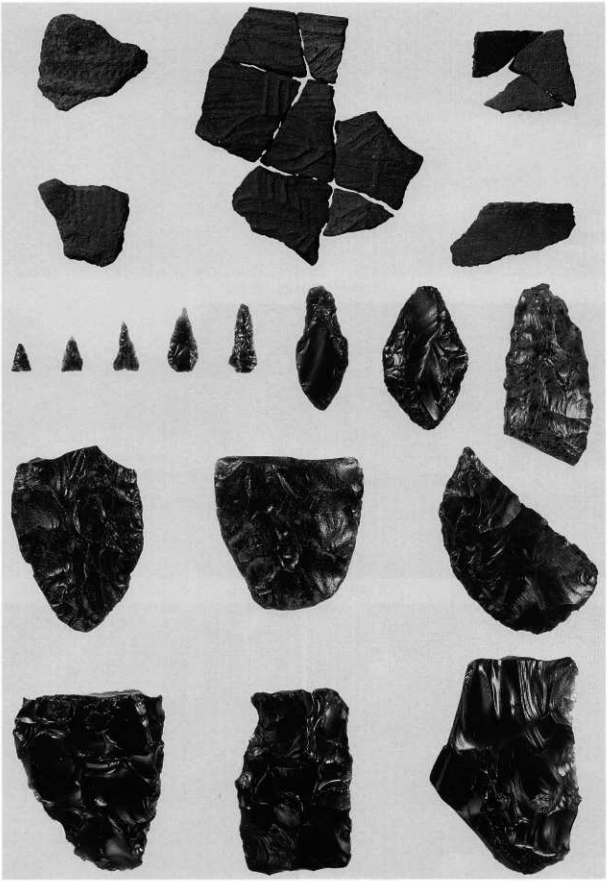
旧白滝８　旧河道調査状況

旧白滝８　旧河道遺物出土状況

旧白滝８　包含層調査状況



旧白滝８　包含層遺物出土状況



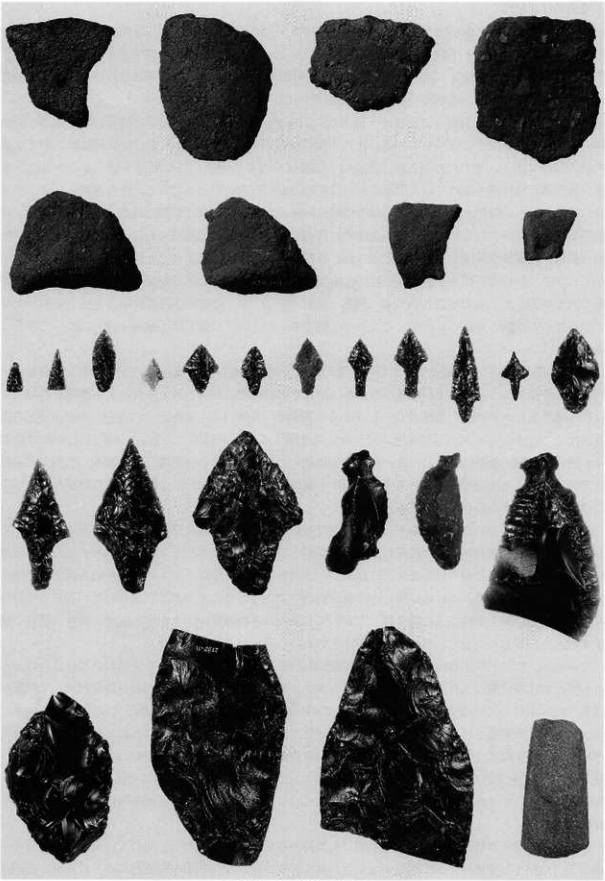
旧白滝８　出土遺物（約1/2）

旧白滝9　調査状況（南から）

下白滝　調査状況（北東から）

下白滝　木根遺物出土状況①

下白滝　木根遺物出土状況②



下白滝　出土遺物（約1/2）

**白滝遺跡群の整理**

今年度は奥白滝11・服部台２・上白滝８・上白滝６・白滝第30地点遺跡の二次整理と、今年度調査した旧白滝８・旧白滝９・下白滝遺跡の一次整理を行った。二次整理に関して説明すると、図化・データ整理は奥白滝11・上白滝８（東地区）・上白滝６（平成13年度調査区）・白滝第30地点遺跡を、石器接合は上白滝６・上白滝８（西地区）・服部台２遺跡を中心に行った。

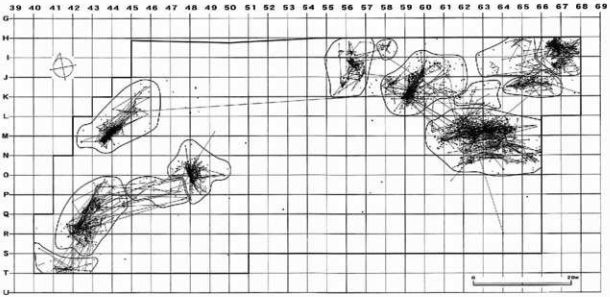
今年度主体的に作業を行った上白滝８遺跡は、国指定史跡「白滝遺跡群」（白滝第13地点遺跡）の南側の一段高い段丘面上に立地している。出土石器の総数が約135万点と膨大で、白滝遺跡群の中では最大級の遺跡である。そのため報告書の作成は、調査区を大きく東西二つに分けて行うこととした。現在、報告書作成作業を進めている東地区からは約70万点の石器が出土している。主な遺物として、サイコロ状の石核、広郷型ナイフ形石器、峠下型細石刃核、大型の石刃核、彫器、掻器、削器、尖頭器、舟底形石器などがみられる。石器分布が全体的に濃密で、接合状況も広範囲にわたって複雑にみられるため、複数の石器群が重複していると考えられ、各石器群を厳密に分離することは困難な状況である。しかし、サイコロ状の石核や「台形様石器」・「小型不定形剥片石器」などと呼ばれている剥片の一部に微細な剥離が施されたものを含む石器群（仮称「白滝Ⅰ群」）は、特徴的な石器や接合関係、分布状況などから他の石器群と分離して整理することが可能であった。ここではその「白滝Ⅰ群」について詳しく説明を行う。

「白滝Ⅰ群」の中には、現在道内で最古と思われる千歳市祝梅三角山遺跡や清水町共栄３遺跡などと同様の石器類や剥片剥離技術の特徴がみられ、それらと同時期のものと考えられる。白滝遺跡群の中では昨年度報告した奥白滝１遺跡のSb－1～6からも同様の「白滝Ⅰ群」が出土している。約9,600点の石器が出土し、さらにそれらは13ヵ所のブロックに分離することが可能である。定形的な石器類は少なく、掻器・削器・錐形石器が若干みられ、大半は剥片の縁辺にわずかな剥離が施される二次加工ある剥片である。中でも片側縁が「く」の字状の剥片・縦長剥片の腹面側やうろこ状剥片の打面部を除去するように加工を施すものが特徴的にみられる。

剥片剥離技術について説明すると、剥片を素材として求心状に寸詰まり・うろこ状の剥片を剥離するもの、素材剥片の腹面を打面に固定して打面部が幅広の剥片や縦長剥片を連続的に剥離するもの、礫素材で交互剥離を行いながら打面を頻繁に転位し、寸詰まり・片側縁が「く」の字状・縦長剥片を剥離するものなどがみられる。これらは同一の接合資料の中でみられることがあり、共存していることが分かる。これは奥白滝１遺跡の「白滝Ⅰ群」においてもみられる特徴だが、上白滝８遺跡の場合、原石の状態で搬入されるものが多く、そのサイズが大きいという違いがある。

その他に、板状・棒状の角礫を素材として縦長剥片を連続的に剥離している資料がみられる。ほとんどが原石の状態で搬入され、分割されるものも多い。石核調整は施されずに原石の稜を利用して剥離が開始され、素材の分割面に打面を固定して石核の両側縁を中心として剥離を行うものや素材の長軸に沿って打面と作業面を交互に入れ替えながら剥離していくものがみられる。得られた縦長剥片から加工されるものは少なく、若干の二次加工ある剥片がみられる程度である。接合資料の中で最大のものは、長さ66.5cm、重量約17.8kg（母岩70・接合177）で、大型の縦長剥片を剥離した後、石核を２分割し、先の剥片も含めて３個体で縦長剥片の剥離を行っている。現在のところ、白滝遺跡群の中で最長の接合資料である。

これらの角礫を素材とした資料は全道的に検出例がみられない。しかし、他の「白滝Ⅰ群」と分布が重なる点や剥片剥離技術に石核調整が全く行われていない点、交互剥離が特徴的にみられる点、打面が大きくバルブが発達する剥片の特徴などから「白滝Ⅰ群」との関連性が強いと考えられる。




上白滝8遺跡東地区「白滝Ⅰ群」接合分布図

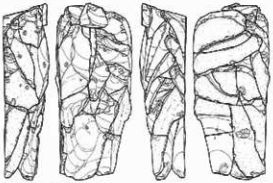
「白滝Ⅰ群」出土石器

二次加工ある剥片

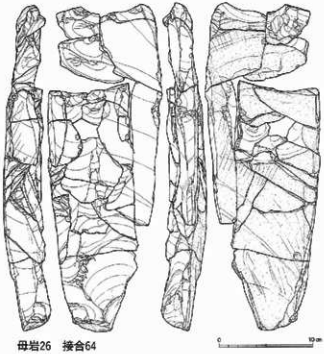
石核

「白滝Ⅰ群」接合資料

母岩4　接合4



母岩34　接合72




母岩26　接合64

## 濁川左岸遺跡（B－15－22）

事 業 名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：日本道路公団北海道支社

所 在 地：北海道茅部郡森町字石倉町401ほか

調査面積：3,630m²

発掘期間：平成14年5月7日～8月30日

調 査 員：熊谷仁志、村田　大、影浦　覚、大泰司統

### 遺跡の概要

遺跡はJR森駅から北西方向に約9km離れた標高37～45mの濁川河岸段丘上に立地する。海岸から約700m内陸の山林内に位置しており、調査区南側には濁川が、北側には無名沢が流れている。調査区中央の沢地形より森側をA地区、八雲側をB地区と呼称して、調査を進めた。便宜的に30ラインを両地区の境界としている。A地区の平坦面は標高42～44m、B地区の平坦面は標高38～40mである。平成13年度にA地区の濁川段丘縁850m²と、B地区の無名沢の段丘縁450m²を調査し、今年はこの両区間の3,630m²について調査をした。2ヵ年の最終調査面積は4,930m²である。

基本土層はⅠ層：表土、Ⅱ層：駒ケ岳火山灰d（Ko－d）層、Ⅲ層：黒褐色土、Ⅳ層：黒色土、Ⅴ層：黄褐色土、Ⅵ層からなる。Ⅲ層とⅣ層の間に白頭山苫小牧火山灰（B－Tm）、Ⅴ層上位に駒ケ岳火山灰g（Ko－g）が部分的に検出されたが、分層はしなかった。調査区中心部にある沢地形をはさんで台地の成因が違うため、Ⅵ層の内容は、A地区黄褐色砂礫層、B地区濁川火砕流堆積物層とそれぞれ異なる。遺物包含層はⅢ～Ⅴ層である。特にⅣ層において多く出土した。

### 遺構と遺物

今年度検出された遺構は、住居跡4軒、ピット35基、焼土6ヵ所、小ピット139ヵ所である。2ヵ年の合計では、住居跡19軒、ピット94基、焼土36ヵ所、小ピット306ヵ所である。

遺構はA・B地区とも昨年の調査区に隣接した部分に多く、調査区中央の沢地形に近づくほど疎になる傾向が認められた。遺構の時期は縄文時代中期前葉から後期前葉にかけてと考えられるが、特に今年度検出した住居跡4軒（H－17～20）は、石組炉の形状・出土遺物などから縄文時代後期前葉と考えられる。これらはいずれも東側の床面から、大形の偏平礫が2個並行させて立てた状態で検出され、規則性が窺える。ピットではP－60で頁岩の大型剝片81点がまとまった状態で出土し、接合作業の結果、これらは同一母岩と考えられる。

出土した遺物の総数は約99,000点で、その内訳は土器等約92,000点、石器等約7,000点である。土器がほぼ全体の9割を占める。時期は縄文時代早期から後期、続縄文時代のものである。中でも後期前葉の余市式・涌元式・鳥崎式・白坂3式等が約82,000点と多く見られた。また、前期の円筒土器下層式が5,300点出土しているが、うち4,900点はB地区で出土し分布の違いを示している。他には中期前葉のサイベ沢Ⅶ式の頃の土器が4,100点出土している。続縄文時代のものでは恵山式と後北式の土器が出土した。石器等では剝片石器でスクレイパー、礫石器ではたたき石が比較的多く見られる。また、定形的な礫石器では扁平打製石器の占める割合が高い。土製品には土製玉、再生土製円板があり、石製品にはヒスイ製の玉が1点出土している。2ヵ年にわたる調査の総出土点数は約196,000点である。

## 2002渭川左岸遺跡　出土遺物集計表

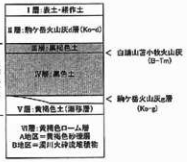
02. 10. 28現在

| | A地区遺構 | A地区包含層 | B地区遺構 | B地区包含層 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 土器・土製品 | 2378 | 68746 | 1577 | 19355 | 92056 |
| 剥片・剥片石器 | 94 | 2458 | 118 | 2068 | 4738 |
| 礫石器・石製品 | 33 | 635 | 60 | 264 | 992 |
| 礫 | 172 | 533 | 120 | 206 | 1031 |
| 合計 | 2677 | 72372 | 1875 | 21893 | 98817 |

## 2002渭川左岸遺跡　検出遺構数

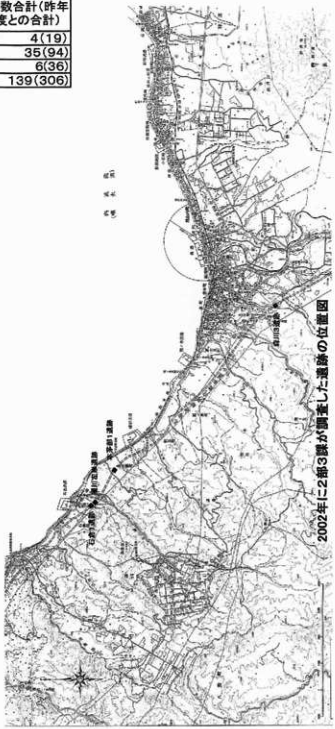
2002. 10. 28現在

| | A地区（昨年度との合計） | B地区（昨年度との合計） | 今年度検出遺構数合計（昨年度との合計） |
|---|---|---|---|
| 竪穴住居跡 | 2(11) | 2(8) | 4(19) |
| 土坑 | 16(64) | 19(30) | 35(94) |
| 焼土 | 6(36) | | 6(36) |
| 小ピット | 139(306) | | 139(306) |

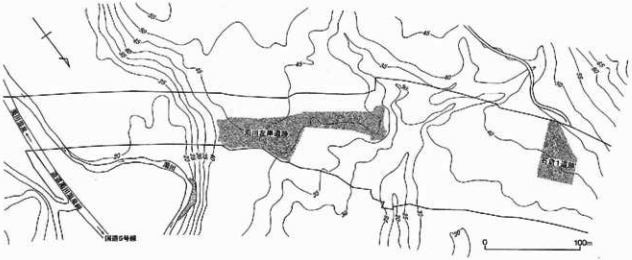



基本土層模式図

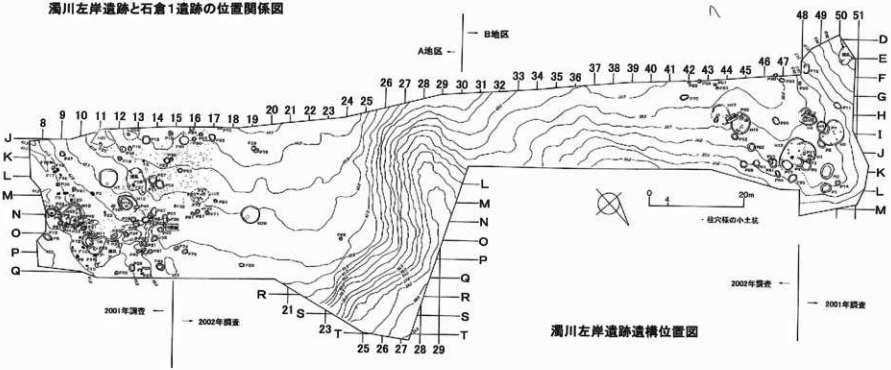
遺跡位置図




2002年に2期3期が調査した遺跡の位置図




濁川左岸遺跡と石倉1遺跡の位置関係図

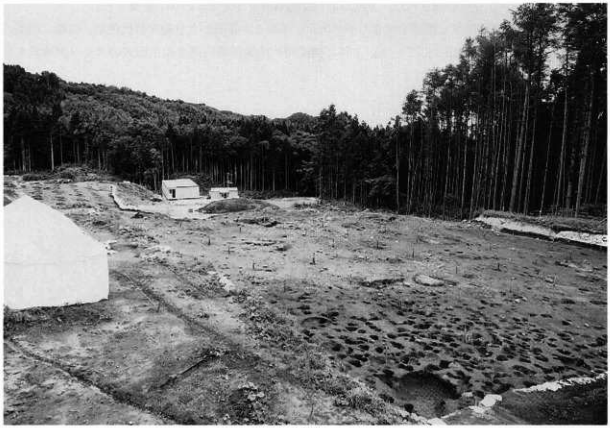



濁川左岸遺跡遺構位置図

P－60　遺物出土状況

H－18　調査風景

H－17（手前）、19　調査風景



完掘

## 本茅部（ほんかやべ）1遺跡（B－15－23）

事 業 名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財調査
委 託 者：日本道路公団北海道支社
所 在 地：山越郡森町本茅部274ほか
調査面積：2,200m²
発掘期間：平成14年5月7日～7月15日
調 査 員：谷島由貴、中山昭大、袖岡淳子

### 遺跡の概要

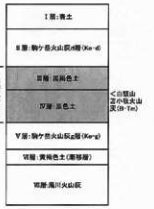
遺跡は森町市街地より約10km八雲町方向へ離れた本茅部地区にあり、内浦湾に面する標高90m前後の海岸段丘上に位置する。海岸線より1kmほど内陸に入り、台地を開析する沢跡より徒歩で急崖を登ると、駒ケ岳が一望できる遺跡に辿り着ける。調査区は、台地の先端部が南西に張り出し、北側には緩やかな沢状地形が2条走る。遺構、遺物を多く検出したのは、調査区南～南西側にかけての沢状地形による影響を受けないところである。

基本土層はⅠ層：表土、Ⅱ層：駒ケ岳火山灰d層（Ko－d）、Ⅲ層：黒褐色土、Ⅳ層：黒色土、上位に白頭山苫小牧火山灰（B－Tm）が部分的に検出されたが分層していない、Ⅴ層：駒ケ岳火山灰g層（Ko－g）、Ⅵ層：漸移層、Ⅶ層：褐色粘質土層、Ⅷ層：（濁川火砕流堆積物層）。遺物包含層はⅢ、Ⅳ層で、Ⅳ層からの出土が多い。

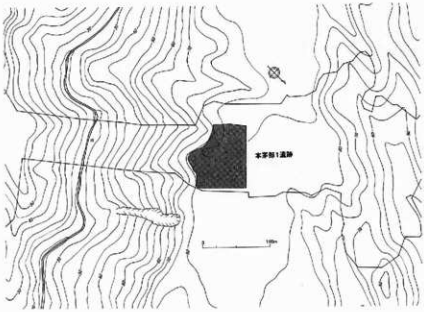
### 遺構と遺物

遺構は縄文時代中期に属する土壙が7基検出されている。土壙はP-1、4を除き調査区南側に集中する。P-2は縄文時代中期前葉に属する土器が1個体立った状態で出土した。P-7は壙底から直径30cm、深さ50cmの柱穴が2ヵ所確認された。上屋のような構築物を支えたものかと推測する。

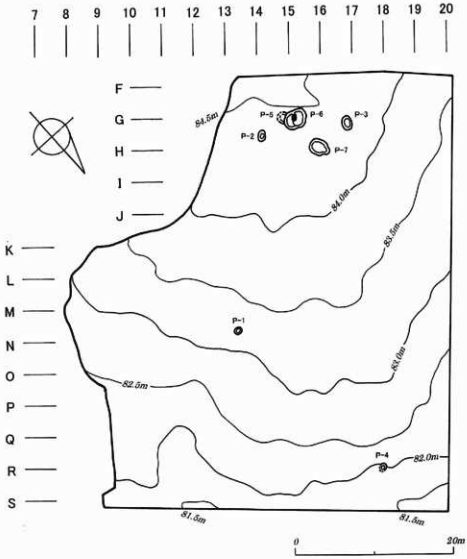
遺物は、Ⅲ層からは中世と推測できる刀子が出土しており、Ⅳ層からは縄文時代前期、中期、晩期の土器、石器等が約5,500点出土している。主体は縄文時代中期前葉円筒土器上層式のサイベ沢Ⅶ式～見晴町式期のものである。



基本土層模式図



遺跡の位置と周辺の地形




遺構位置図

調査風景

完掘

## 倉知右岸遺跡

**事 業 名**：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査

**委 託 者**：日本道路公団北海道支社

**所 在 地**：茅部郡森町字栗ヶ丘７ほか

**調査面積**：9,350m²

**発掘期間**：平成14年５月７日～10月31日

**調 査 員**：種市幸生、菊池慈人、新家水奈、坂本尚史、福井淳一、柳瀬由佳

### 調査の概要

遺跡は、南西側の山地から続く、標高74～80m付近の緩斜面上に立地している。噴火湾の海岸線までは約1.5km、鳥崎川本流までは約0.9kmである。調査区は、北西側を鳥崎川の支流である倉知川に、南東側を無名の沢に区切られた台地状の地形となっており、川との高低差は約５mである。無名沢は調査区から50mほど溯ると湧水点に達する。

遺構・遺物は、無名沢側の斜面際に集中しており、そこから、縄文時代後期前葉に属する、配石遺構・フラスコ状ピットをはじめとする遺構群が検出された。

### 遺構と遺物

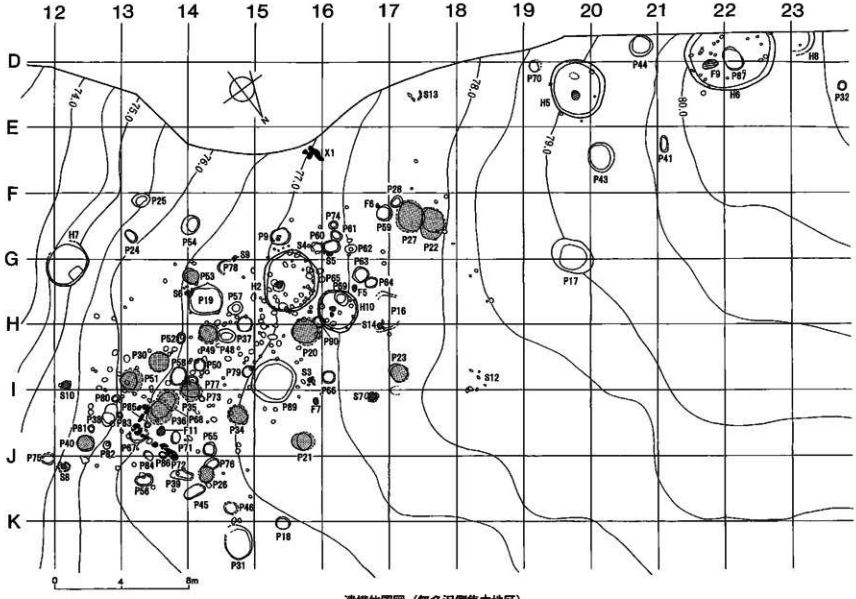
検出された遺構は、配石遺構１基、竪穴住居跡９軒、土坑（土壌を含む）90基、焼土11ヵ所、石組炉14ヵ所、柱穴状ピット226ヵ所である。その多くは無名沢側に集中しているが、倉知川側にもややまとまる傾向がある。

無名沢側の遺構の集中部分には、中期前半の竪穴住居跡などのまとまりと、後期前葉の配石遺構・土坑などのまとまりが認められる。中期前半の遺構のまとまりは、無名沢からやや離れた調査区山側に位置しており、調査区域外に続くものと予想される。後期前葉の遺構のまとまりは、無名沢へ続く斜面際に位置しており、配石遺構・フラスコ状ピットなどの土坑・石組炉・柱穴状ピット・竪穴住居跡が密集して分布する。またこの範囲では、土層の堆積状況から、土地の造成が行われた可能性が認められた。遺構間の新旧関係とともに、今後詳細な検討が必要である。

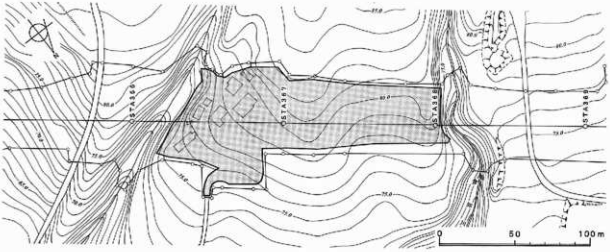
倉知川側の遺構のまとまりは、主に後期後葉のものである。

出土遺物は約８万点である。包含層の遺物は、無名沢の斜面際から斜面にかけて集中して出土している。土器は、中期前半の円筒上層ｂ～ｄ式・サイベ沢Ⅶ式、後期前葉の鳥崎式・大津式などが多く、そのほか早期前半の貝殻文系のもの、前期後半の円筒下層式、後期後葉の堂林式などが少数出土している。石器は、これらの土器に伴う石鏃・スクレイパー・半円状扁平打製石器・北海道式石冠などが出土している。土玉や土偶の足、「石冠様石器」などの土製品・石製品も少量出土している。

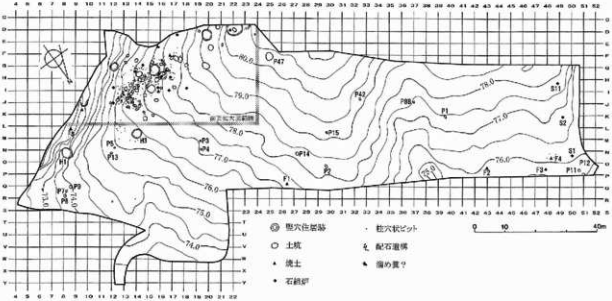
遺跡の位置




遺構位置図（無名沢側集中地区）




遺跡周辺の地形と調査の範囲




遺構位置図

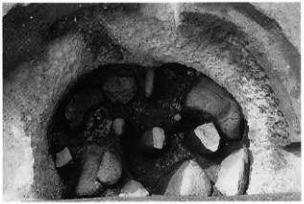
縄文時代中期の竪穴住居跡（H－5）

縄文時代中期の土壙（P－87）

縄文時代後期の配石遺構

縄文時代後期の竪穴住居跡（H－2）

遺構集中地区完掘状況



縄文時代後期のフラスコ状ピット（P－20）

## 森川（もりかわ）3遺跡（B－15－26）

事 業 名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財調査

委 託 者：日本道路公団北海道支社

所 在 地：山越郡森町字森川町317－18ほか

調査面積：2,200m²

発掘期間：平成14年7月16日～平成14年10月25日

調 査 員：谷島由貴、中山昭大、袖岡淳子

### 遺跡の概要

海岸線から2kmほど内陸に入った森川の河岸段丘上に立地する。標高95m前後のほぼ平坦な遺跡である。調査区北西側数10mのところに森川が流れており、段丘下には森川4遺跡があり、対岸には森川2遺跡、さらに小河川を挟んで上台1遺跡と続いている。

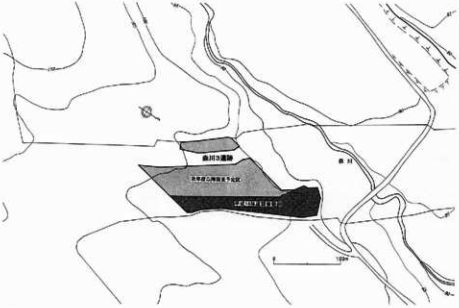
基本土層はⅠ層：表土、Ⅱ層：駒ケ岳火山灰d層（Ko－d）、Ⅲ層：黒色土、Ⅳ層：白頭山苫小牧火山灰（B－Tm）、Ⅴ層：黒色土、Ⅵ層：駒ケ岳火山灰g層（Ko－g）、Ⅶ層：褐灰色埴土、Ⅷ層：明黄褐色埴壌土（最終面）。遺物包含層はⅢ層～Ⅴ層である。

### 遺構と遺物

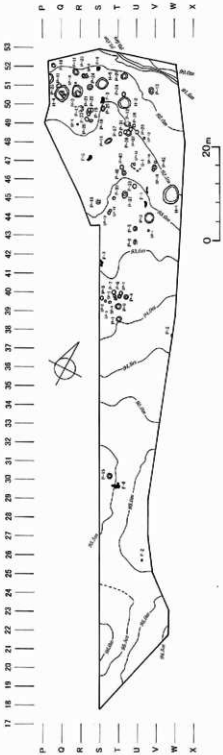
遺構は縄文時代前期～中期のものが主体で、竪穴住居跡5軒、土壙43基、焼土7ヵ所（1ヵ所は石組み炉）、小ピット16ヵ所、及び近世の畑等があり、段丘縁辺部から多く検出された。土壙は縄文時代前期の墓壙、続縄文時代のものも1基検出されている。畑は調査区のほぼ全面に広がっており、Ⅳ層を掘り込んで幅1m程の畝を作り出していた。焼土の内、石組み炉以外の6ヵ所は畑に伴うものである。

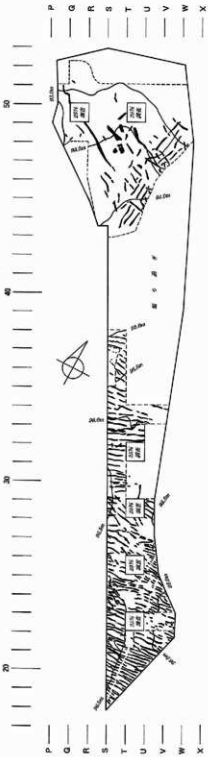
遺物はコンテナ160箱分が出土した。遺構と同様、段丘縁辺部に分布密度が高い。土器は縄文時代前期の円筒土器下層a式のものが多いが、その他、中期の円筒土器上層式、後期前葉のもの、続縄文時代の恵山式・後北式などもある。石器は石鏃、スクレイパー、礫石器等である。他に、畑との関連が想定される鉄製品が1点出土している。

基本土層模式図




遺跡範囲と周辺の地形



畑調査風景

H－3　穴堀

## 石倉（いしくら）1遺跡（B－15－29）

事 業 名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：日本道路公団北海道支社

所 在 地：茅部郡森町字石倉町396・404

調査面積：1,753m²

発掘期間：平成14年9月2日～平成14年10月25日

調 査 員：熊谷仁志、村田　大、影浦　覚、大泰司統

### 遺跡の概要

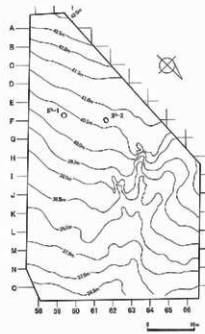
遺跡は濁川左岸遺跡の無名沢を挟んだ対岸の台地上に位置する。北東向きの緩斜面で標高は38～43mである。調査区の西から北東へ沢跡が見られた。土層観察からKo－d降下以前は恒常的に水が流れていたと思われる。木製品等は出土していない。また、試掘調査の結果から次年度以降の調査区である西側の台地と東側の無名沢へ向かって遺物が多くなる傾向が認められる。

基本土層はⅠ層：黒褐色土、表土・耕作土、Ⅱ層：駒ケ岳火山灰d層（Ko－d）、Ⅲ層：黒褐色土、Ⅳ層：黒色土、Ⅲ層とⅣ層の間で部分的に白頭山苫小牧火山灰（B－Tm）が見られる、Ⅴ層：黄褐色土、駒ケ岳火山灰g層（Ko－g）に由来する橙褐色砂質土を含む、Ⅵ層：黄褐色ローム層で、遺物包含層はⅢ層～Ⅴ層である。

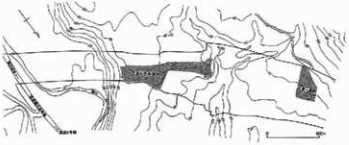
### 遺構と遺物

遺構は縄文時代後期のものと思われる土壙2基を検出した。IP－1は壙口部に台石を含む大形礫が検出された。覆土は埋め戻しで、土壙墓の可能性がある。周辺から大形の礫が数点出土しているが土壙との関連は不明である。

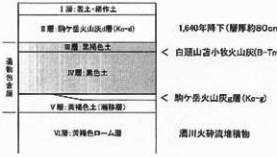
遺物は土器・石器などをあわせて1,480点が出土した。土器は縄文時代中期から後期初頭のものが主体である。石器は剥片石器では、石鏃、スクレイパー、石核が多く、礫石器ではたたき石が多いのが特徴である。また、続縄文時代の後北式が1個体まとまって出土している。




遺構位置図



遺跡の位置




基本土層模式図

調査状況（南から）

IP－1　確認（北から）

## 野田生（のだおい）1遺跡（B－16－47）

**調査要項**

事 業 名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：日本道路公団北海道支社

所 在 地：山越郡八雲町野田生317－6ほか

調査面積：11,160m²（平成12、13年度調査面積の合計、内4,820m²が遺構確認調査範囲）

整理期間：平成14年4月1日～平成15年3月31日

調 査 員：種市幸生、菊池慈人、藤井　浩、坂本尚史、福井淳一

**発掘調査の成果**

遺跡は八雲町「野田生」地区に位置し、噴火湾沿岸の遺跡群を構成する。平成12年と13年度に行われた発掘調査により、竪穴住居跡34軒、土壙、配石遺構139基、焼土32カ所、遺物集中出土地点48カ所が検出され、縄文時代中期から後期を中心とする集落遺跡が明らかになった。出土遺物は土器が約12万点、石器・礫が8万点で、縄文時代後期後半の時期を中心に後期前葉トリサキ式、中期サイベ沢Ⅶ式、早期貝殻文土器、統縄文恵山式の時期など広範囲にわたっている。

良好な保存状況が大きな特徴であり、竪穴住居跡からは完形状態の土器が多数出土した。特に完形の赤彩注口土器や朱塗り櫛、ベンガラ、アスファルトなどが住居床面上から出土した点は遺構、遺跡の性格を考えるうえで重要である。

本年度はこれらの成果についての報告書作成に向けた整理作業を行った。

**整理作業の内容**

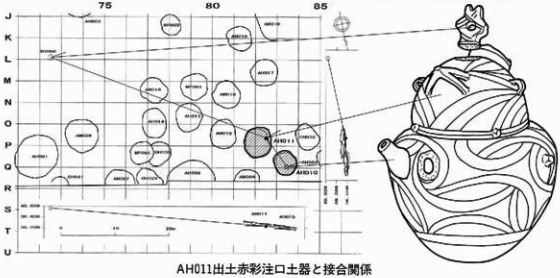
整理作業は土器の接合、復原、遺物の実測、写真撮影、図版作成、遺物、遺構データの整理などが主な内容であり、遺跡地形図の作成、デジタル処理や赤彩土器と朱塗り櫛の保存処理、自然科学的分析などは専門業者に委託して行った。

土器接合及び復原作業については、竪穴住居跡（AH011）出土の赤彩注口土器が遺構間接合により完形となった事実（図参照）を踏まえたうえで、復原個体における接合破片の出土位置関係とその接合展開を重視しながら作業を進めた。その結果、200以上の個体を復原するとともに、後期竪穴住居間の接合関係が数多く明らかになり、隣接する住居の時期差の問題や遺物の人為的な移動の可能性を知るうえで重要な資料になると考えられる。

石器・礫の整理については出土状況を重視した分類選別を行い、竪穴住居の炉に伴う立石や配石に用いられた礫などについても、加工の有無以上に遺構との関連の深さなどを考慮したうえで、整理作業を行った。

赤彩土器と朱塗り櫛については実測及び写真撮影後に㈱東都文化財研究所に委託して保存処理作業を行った。赤彩土器については溶剤系アクリル樹脂を4段階に分けて塗布した後、本体と頸部突起、注口部分の接合を行った。朱塗り櫛については漆膜から土を除去した後、アクリル樹脂を含浸し固定した。

遺物、遺構データの整理はトータルステーションシステムを用いてパソコン上で行った。遺物については属性や接合関係を入力し、データベースを構築した。遺構に関しても3次元データとして管理し、航空写真から作成した遺跡地形図のデジタル処理化により、調査区内の地形情報と遺物、遺構データとの合成、統合的な把握が可能になった。しかし、確認作業の不徹底により生じた遺物データの混乱が整理作業の進行状況に与えた影響は大きく、今後の活用を図るうえでの反省点としたい。




AH011出土赤彩注口土器と接合関係

## 落部1遺跡（B－16－77）

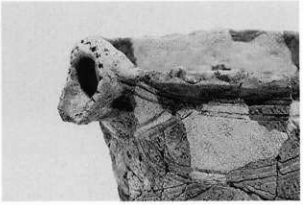
事 業 名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：日本道路公団北海道支社
所 在 地：山越郡八雲町入沢374ほか
調査面積：5,471m²
整理期間：平成14年4月1日～平成15年3月31日
調 査 員：遠藤香澄、藤原秀樹

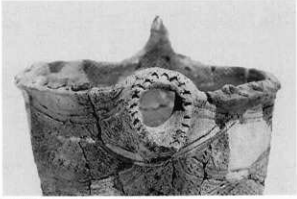
**整理の概要**

発掘調査は平成13年度に終了している。縄文時代中期から続縄文後半期までの遺構・遺物が検出されている。遺構は住居跡2、土壙7、Tピット7、集石4、焼土14、炭化物集中1である。遺物はその8割以上が中期前半のサイベ沢Ⅶ式期のもので、検出された2軒の住居跡もほぼ同時期のものである。平成13年度は遺構図等の原図の見直しと素図作成、石器の再分類、遺物台帳の修正等の作業を行い、本格的な整理作業および報告書の刊行は平成14年度行うこととした。

平成14年度は土器の分類見直しおよび接合・復元作業から開始し、加えて拓影図の作成、断面実測、土器実測・トレース、石器の実測・トレース、遺構図のトレース、集計作業等を行った。接合作業では17ヵ所検出された「土器集中」の資料を中心に、その周辺部の包含層のものとの接合関係の把握に努め、分布図の作成も併せて行った。この結果、サイベ沢Ⅶ式を主体に47個体が復元された。また、土器実測と並行し写真撮影を行い、順次挿図・写真図版の作成、一覧表作成、編集作業を行った。

復元された土器の中にサイベ沢Ⅶ式の口縁部に注口部のついた深鉢が1個体ある（写真）。北海道内ではこれまで中期の類例は知られていない。





縄文時代中期前半サイベ沢Ⅶ式期の注口部のある土器

## 本内川右岸遺跡（B－15－7）

事 業 名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：日本道路公団北海道支社

所 在 地：茅部郡森町字石倉町610－7ほか

調査面積：2,746m²（平成13年度）

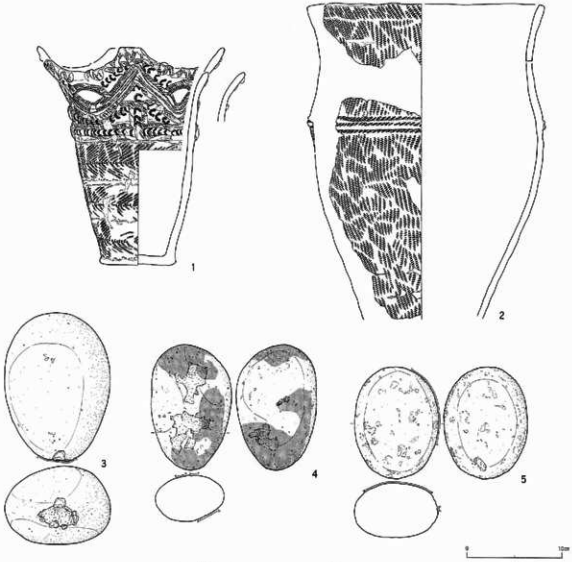
整理期間：平成14年4月1日～平成15年3月31日

調 査 員：中田裕香

**整理の概要**

発掘調査は平成13年度に終了している。遺構は土壙3基が検出されたが、それらのうち時期の推定できるものは、1基が縄文時代中期前葉、1基が中期後葉である。遺物は縄文前期から晩期、擦文文化期のものが出土しており、主体となるのは中期前葉と後葉のものである。

報告書の刊行は平成14年度とし、13年度には土器の接合・復原、遺物台帳の訂正、写真台帳の整理を行った。14年度には遺構図等の製図、遺物の実測・拓影の作成、集計作業、遺物分布図・一覧表の作成、遺物の写真撮影、挿図・写真図版の作成、編集作業を行った。




出土遺物（1　P－3、2～5　包含層出土）

**キウス４遺跡（A－03－92）**

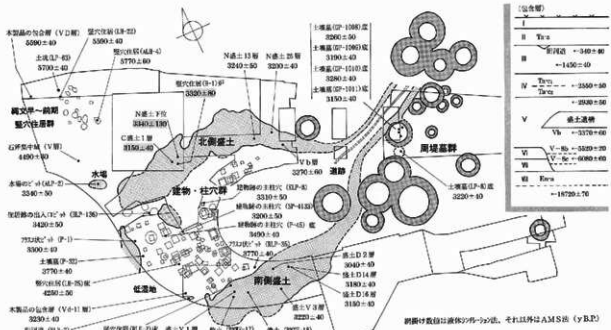
事 業 名：北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：日本道路公団北海道支社
所 在 地：千歳市中央208－12ほか
調査面積：4,240m²（R地区）
整理期間：平成14年４月１日～平成15年３月31日（継続・最終年度）
調 査 員：佐川俊一、阿部明義、山中文雄

**遺跡の概要**

遺跡は千歳市街地から北東約８km、馬追丘陵の西側緩斜面、標高４～19mに位置している。縄文時代後期後葉を主体とし、北東約300mにはほぼ同時期の国指定史跡『キウス周堤墓群』がある。遺跡の構造は、周堤墓群のある丘陵側、土壙・柱穴群のある緩斜面端部、水場遺構のある低地に大きく分けられ、さらに土壙・柱穴群をとり囲むように盛土遺構が形成されている。また、低地側には縄文時代早～前期の竪穴住居群がある。総遺物点数は600万点を超えており、土器約500万点、石器約100万点、木製品・その他約1,000点に達している。大部分は縄文時代後期後半に属するものである。

**整理の概要**

キウス４遺跡では平成５・７～10年度に発掘調査を行い、北埋調報119集『キウス４遺跡』を初めとして平成13年度までに８冊の報告書を刊行した。今年度は昨年度に引き続き、約430万点の遺物が出土したR地区の整理作業を行った。昨年までに遺構図作成・遺物整理・遺物図版作成・遺物写真撮影などを終了し（一部除く）、今年度は遺物接合図・分布図等の作成・総集計・一覧表作成・原稿執筆・遺物収納作業などを行い、報告書の刊行作業を行った（北埋調報180集『キウス４遺跡(9)』）。またキウス４遺跡全体のまとめを若干行い（図・表例）、その分を含めた報告書の刊行を予定している（平成14年度末・『キウス４遺跡(10)』）。




キウス４遺跡　主な遺構群と $^{14}$C年代測定値（補正年代）

※自然科学的手法による分析・鑑定について

キウス4遺跡の各報告書刊行にあたって、下記にあげるように多種多数に亘って分析・鑑定を依頼・委託してきた。その結果、遺跡の古環境を推定復元したり、当時の人々の動・植物の利用のあり方や遺物製作技術の一端を明らかにしたり、遺物の原材入手先（交易のあり方）の推定をするなど、考古学的な考察からは限界のある事象についての貴重な資料及び見解を得ることができた。これらの成果は各報告書の個々の記載事項やまとめに反映されているが、さらに遺跡全体としてのまとめを行っているところである（『キウス4遺跡(10)』）。

一例として放射性炭素 $^{14}$C年代測定の結果の一部を図示した（左下図）。これらの数値は遺跡の形成過程を考察したり遺物の編年を考察したりする際の重要な資料となる。ただし、測定方法（液体シンチレーション・AMS）や測定試料の内容（炭化材・堅果・ススほか）・量などに十分注意をしながら利用していくことになる。

**表　キウス4遺跡分析一覧**

| 分析内容 | キウス4遺跡報告書番号 | | | | | | | | | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 『(1)』 | 『(2)』 | 『(3)』 | 『(4)』 | 『(5)』 | 『(6)』 | 『(7)』 | 『(8)』 | 『(9)』 | |
| $^{14}$C年代測定【液体シンチレーション】（京都産業大学） | | 15 | 5 | | | | | | | 20 |
| $^{14}$C年代測定【AMS】（㈱地球科学研究所） | | | 21 | 10 | 15 | 1 | 19 | 4 | 15 | 85 |
| テフラ分析（㈱センター　花岡正光） | | | 11 | | | | | | | 11 |
| 地割れ観察（北海道立地質研究所　廣瀬亘ほか） | | | | | 1地点 | | | | | 1地点 |
| 花粉分析（北海道開拓記念館　山田悟郎） | | 1地点 27試料 | | | | | | | | 1地点 27試料 |
| 珪藻分析（石狩市教育委員会　志賀健司） | | 1地点 28試料 | | 1地点 26試料 | | | | | | 2地点 54試料 |
| 花粉・珪藻・植物珪酸体分析（㈱パリノ・サーヴェイ） | | | 3地点 68試料 | | | | | | 3地点 32試料 | 6地点 100試料 |
| 人骨の人類学的観察（国立科学博物館　松村博文ほか） | | | | | 11 | | | | | 11 |
| 動物遺存体の同定（千歳サケのふるさと館　高橋理） | | 325 | 390 | 76 | | 19 | 339 | 428 | 855 | 2432 |
| 植物種子の同定（札幌国際大学　吉崎昌一ほか） | | 77 | 38 | 47 | | 19 | 15 | 150 | 324 | 670 |
| 炭化材樹種同定（㈱パリノ・サーヴェイ） | | 21 | | | | | | | 6 | 27 |
| 炭化材樹種同定（北海道大学　佐野雄三ほか） | | | | | 6 | | | | | 6 |
| 木製遺物の樹種同定（当センター　畑地育子） | | 20 | 166 | 223 | | | | | 246 | 655 |
| キノコ同定（北海道大学名誉教授　五十嵐恒夫） | | | | | | | | | 3 | 3 |
| 脂肪酸分析（㈱スコーシャ） | | | 17 | | 37 | | 6 | | 3 | 63 |
| アスファルト分析（北海道大学　小笠原正明） | | 4 | | | | | | 6 | 7 | 17 |
| 赤色顔料・漆製品分析（北海道開拓記念館　小林幸雄） | | 6 | 5 | | | | | | 15 | 26 |
| 黒曜石原産地分析（京都大学　蓑科哲男） | | 50 | 17 | 50 | 11 | | 30 | | 21 | 179 |
| 黒曜石水和層測定（京都大学　蓑科哲男） | | | | 50 | 11 | | | | | 61 |
| ヒスイ製品・玉類原産地分析（京都大学　蓑科哲男） | | 3 | | | 8 | | | 30(うちヒスイ9) | | 41 |

数字略。　『(2)』・『(3)』……は『キウス4遺跡(2)』・『キウス4遺跡(3)』……をさす。
なお『(1)』とは、北埋調報119集『キウス4遺跡』をさす。

**ユカンボシC15遺跡（A－03－263）**

事 業 名：北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：日本道路公団

所 在 地：千歳市長都1190－11ほか

調査面積：14,880m²（平成8年度：3,025m²・平成9年度：8,855m²・平成10年度：3,000m²）

整理期間：平成14年4月1日～平成15年3月31日（継続）

調 査 員：三浦正人、鈴木　信、吉田裕吏洋

**遺跡の概要**

遺跡はJR千歳駅の北方約400mに位置する。往時、千歳川・長都川・ユカンボシ川等の水を集めた長都沼が広がる停滞水域・低湿地の西端部で、ユカンボシ川に隣接する標高5～9mの地帯に営まれた、旧石器～近世アイヌ文化期の複合遺跡である。主体となる擦文～アイヌ文化期では、IB4～IB1・0B層から、1万点以上もの木製品が出土している。IB3層中には10世紀前葉の降下である苫小牧－白頭火山灰（B－Tm）が断続的に分布する。木製品には、舟とその関係品・生活用品・狩漁具・祭祀具・建築材のほか、漆椀・曲物・竹製品などの本州産品も含まれている。

**整理概要**

調査は平成8・9・10年度に行われ、順次整理作業が継続されて、昨年度まで5冊の報告書を刊行している。整理最終年度となる今年度の報告は、修正・追加・調査成果のまとめが主な内容となる。

最終的な取りまとめとして、木製品を主とした遺物の分類補正・台帳訂正・実測図作成整理・樹種同定・保存処理・接合復元・写真撮影・フィルム等整理を進めている。分類補正や台帳訂正は、木製品台帳をパソコンに入力して整理し、新たなデータの追加やカード書き替え、写真整理等と連動を図る作業として継続している。実測図と写真は、修正・追加と木製製品種別報告のための作業。樹種同定は、木製品や層位と樹種選定・交易の関わりを捉えるために、再確認や不確定種の調査を主体にして、（独）森林総合研究所　平川泰彦氏の指導を受け作業している。保存処理はマンニトール＋PEG含浸による真空凍結乾燥法とPEG含浸法で対処している。短期間で処理が進む小型品は外部との委託契約でも処理している。立体的製品や脆弱なものは、接合復元して強化し収蔵・展示に備えている。

**前年度までの報告書の主な内容**

［平成9年度　千歳市ユカンボシC15遺跡(1)北埋調報128集］

東側①③区の台地・低湿部の遺構と遺物

擦文文化期の周溝のある墓や土坑墓・擦文～アイヌ文化期の木製品など

［平成10年度　千歳市ユカンボシC15遺跡(2)北埋調報133集］

西側②④区の縄文時代の遺構と遺物・旧石器時代の石器と木本遺存体

［平成11年度　千歳市ユカンボシC15遺跡(3)北埋調報146集］

西側②④区台地部の擦文～アイヌ文化期の遺構と遺物

同低湿部の擦文文化期前期以前の遺構遺物（木製品など）

住居跡・建物跡・土坑墓・焼土等・擦文土器・石器・金属製品・擦文文化期前期の木製品

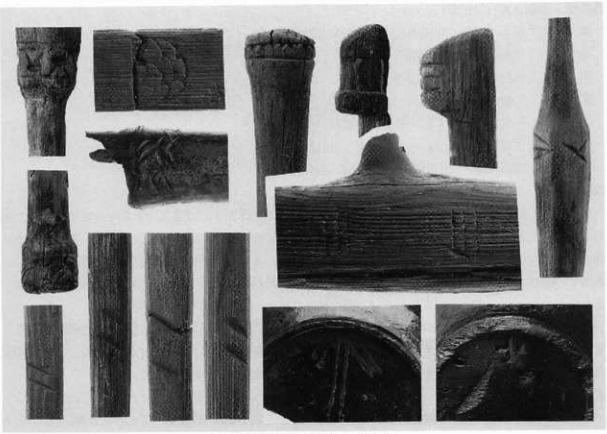
［平成12年度　千歳市ユカンボシC15遺跡(4)北埋調報159集］

西側②④区の低湿部ⅠB3層より上位の遺構と木製品以外の遺物全て

同低湿部のⅠB3層（擦文文化期中後期）の木製品

［平成13年度　千歳市ユカンボシC15遺跡(5)北埋調報176集］

西側②④区の低湿部ⅠB2層より上位（アイヌ文化期）の木製品



木製品に彫られた刻文のいろいろ

樹種同定作業と顕微鏡写真

漆椀実測作業

## 西島松（にしじまつ）5遺跡（A－04－38）

事 業 名：柏木川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道札幌土木現業所

所 在 地：恵庭市西島松539、543、544－2、3

調査面積：2,690m²

発掘期間：平成14年5月7日～平成14年10月31日

整理期間：平成14年4月1日～平成15年3月31日

調 査 員：佐藤和雄、土肥研晶、佐藤　剛、石井淳平

### 遺跡の概要

遺跡は、恵庭市の西方、JR恵み野駅から北西約800mに位置する。遺跡は、南東を柏木川、北西を柏木川の支流であるキトウシュメンナイ川に挟まれた標高約25mの沖積低地上に立地する。今年度は遺跡調査の3カ年目にあたり、平成12年度に検出された周溝のある墓の隣接地を調査した。平成12年度の調査区との境は、畑跡と居住域で引かれたものだが、擦文時代の墓域もこの線と重なるように途切れた。また、キトウシュメンナイ川寄りからは、新たに擦文時代の住居跡が検出された。

基本土層は、Ⅰ層：表土・耕作土、Ⅱ層：黒色土、Ⅲ層：漸移層、Ⅳ層：黄褐色土（支笏軽石流の2次堆積）となっている。調査区内には部分的に樽前a降下軽石層がⅡ層上に残存していた。また遺物包含層であるⅡ層は縄文後期～晩期初頭の盛土遺構を境にⅡA層、ⅡB層に分けた。

### 遺構と遺物

今年度の調査では、竪穴住居跡6軒、土坑58基（このうち1基は土壙墓）、Tピット3基、焼土171カ所、柱穴775基が検出された。この他、台地上に多量の遺物を含む、縄文時代後期後葉から晩期初頭にかけての人為的な層が広く分布するのを確認、これを盛土遺構とした。

遺物は、土器406,792点、石器90,386点、土石製品1,070点、骨角器3点、鉄製品3点が出土した。今後、土壌水洗等から得られた遺物の整理が進めば、遺物点数はやや増えると考えられる。出土した土器のうち93％が盛土遺構と同時期の遺物で、残りの6％が縄文時代中期、次いで0.4％が続縄文時代、縄文時代後期中葉の遺物である。

### 整理の概要

平成13年度調査の報告書作成作業を行った。

平成13年度の調査では、竪穴住居跡9軒、土坑131基、Tピット2基、焼土98カ所、柱穴1,498基、盛土遺構3カ所（MA、MB、MC）を検出し、遺物は土器563,537点、石器108,503点、土石製品1,100点、骨角器13点が出土した。これらのうち、盛土遺構と低位段丘及び斜面で検出された遺構（土坑4基、焼土8カ所）を除く、台地上の遺構と遺物の整理を行った。

土器・石器は接合・復元と実測図・拓影図の作成、図版作成、写真撮影を行った。フローテーション資料から抽出した動物遺存体と炭化種子については選別・同定作業を行った。

平成12年度の調査で土壙墓から出土した金属製品は、保存処理を継続して進めており、観察カード作成、X線写真撮影、クリーニング、実測図作成、脱塩、樹脂含浸を行った。また、残存状態の良好な刀剣類20点は、榊元興寺文化財研究所保存科学センターに委託している。

報告書は次年度に刊行する予定である。

遺構位置図

住居跡調査状況（南から）

住居跡遺物出土状況

カマド部遺物出土状況

## 3　現地研修会の記録

**現地研修会の概要**

9月5日（木）、6日（金）に千歳市オルイカ1遺跡、オルイカ2遺跡を主会場にして現地研修会を行った。今回は調査中の遺跡での研修にあわせて「千歳市周辺における遺跡調査の歴史」のテーマで講師二人を依頼した。講師のひとり佐藤一夫氏には「苫東埋文調査の顧末」の題での講演とともに、詳細な記録集を作成していただいた。さらに野村崇氏には「馬追丘陵における1960年前後の遺跡調査」についての講演、並びに現地案内をお願いした。

佐藤一夫氏は、さきに理事、現在監事として、野村崇氏は前年まで評議員として、当埋蔵文化財センターの運営に、ご尽力いただいている。

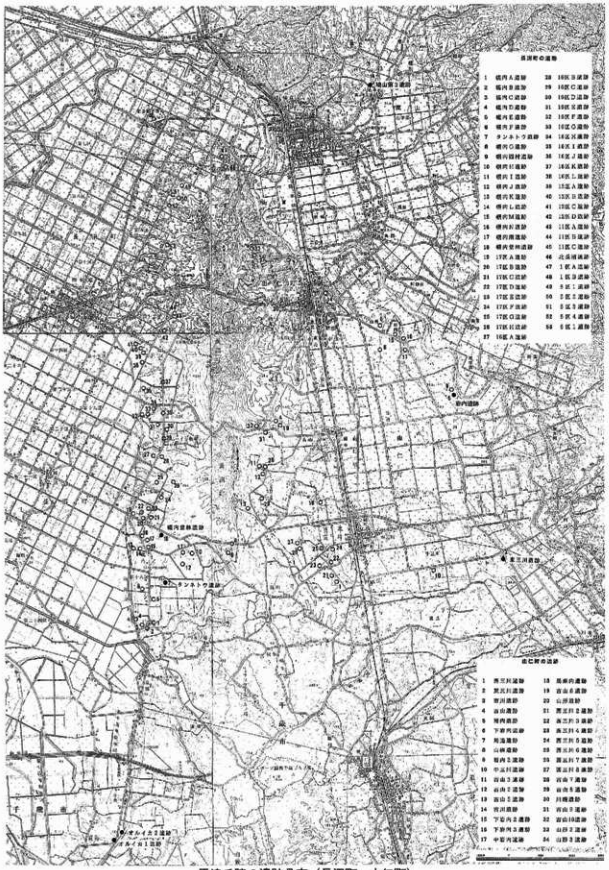
ここに講師二人の講演会資料と、遺跡現地案内で使用した遺跡分布図を再録する。

なお、遺跡巡検、考古資料探索では以下のところを訪ねた。

関係の機関には記してお礼申し上げます。

長沼町：タンネトウ遺跡、幌内神社、長沼町役場（12区B遺跡出土の異形環状土器）
由仁町：東三川遺跡、岩内遺跡、ゆめっく館（岩内遺跡ほか町内の出土遺物）
恵庭市：カリンパ3遺跡展示室

異形環状土器を説明する野村崇氏




馬追丘陵の遺跡分布（長沼町、由仁町）

苫東埋文調査の顛末

佐藤一夫
（勇武津資料館館長）

図1　昭和48～50年度分布調査地区および遺跡位置

表1　昭和48～50年度　掘開状況

| 年度 | 地区 | | 予定面積 (ha) | 実施面積 (ha) | 掘開溝数 (本) | 掘開面積 (㎡) | 掘開土量 (㎥) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 昭和48年度 | A | 柏原 | 690 | 287.7 | 402 | 4,824 | 7,236 |
| | B | 静川西 | 25 | 23.1 | 20 | 240 | 360 |
| | C | 髙森北 | 70 | 85 | 121 | 1,452 | 2,178 |
| | D | 髙森南 | 302 | 397.2 | 897 | 10,764 | 16,146 |
| | E | 浜厚真 | 137 | 175 | 200 | 2,400 | 3,600 |
| | F | 弁天 | | 237.1 | 1,406 | 16,872 | 25,308 |
| | 計 | | 1,224 | 1,205.1 | 3,046 | 36,552 | 54,828 |
| 昭和49年度 | A | 弁天浜厚真 | 410 | 410 | 1,015 | 8,120 | 12,180 |
| | B | 静川台地 | 75 | 75 | 207 | 1,656 | 2,484 |
| | C | 柏原台地 | 400 | 400 | 1,290 | 10,320 | 15,480 |
| | D | 東柏原湿地 | 164 | 164 | 335 | 2,680 | 4,020 |
| | E | 西柏原湿地 | 123 | 123 | 77 | 616 | 924 |
| | F | 静川湿地 | 142 | 142 | 211 | 1,688 | 2,532 |
| | 計 | | 1,314 | 1,314 | 3,135 | 25,080 | 37,620 |
| 昭和50年度 | A | 弁天 | 410 | 410 | 587 | 4,696 | 7,044 |
| | B | 弁天湿地 | 145 | 145 | 207 | 1,656 | 2,484 |
| | C | 柏原湿地 | 16 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | D | 柏原台地 | 421 | 421 | 867 | 6,936 | 10,404 |
| | E | 遠浅 | 70 | 37 | 156 | 1,248 | 1,872 |
| | F | 静川・共和 | 126 | 95.5 | 200(穴) | 800 | 1,200 |
| | 計 | | 1,188 | 1,108.5 | 200(穴) 1,817 | 15,336 | 23,004 |
| 3か年 | 合計 | | (ha) 3,726 | (ha) 3,627.6 | 200(穴)本 7,998 | (㎡) 76,968 | (㎥) 115,452 |

図2　苫小牧市東部大規模工業基地開発計画

表2　苫東遺跡群発見遺跡数の変遷

遺　跡

| 期間＼市・町 | | 苫小牧市 | 厚真町 | 早来町 | 合　計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 分布調査以前 | 1973以前 | 5 | 1 | 0 | 6 |
| 分布調査中 | 1973～1975 | 19 | 10 | 2 | 31 |
| 本調査中 | 1975～1984 | 61 | 2 | 13 | 76 |
| 本調査後 | 1984～2001 | 5 | 1 | 1 | 7 |
| 現　在 | 2002 | 90 | 14 | 16 | 120 |

表3　苫東遺跡群種別区分一覧

重複有り

| 種別＼市・町 | 苫小牧市 | 厚真町 | 早来町 | 合　計 |
|---|---|---|---|---|
| 遺跡包蔵他 | 55 | 6 | 15 | 76 |
| 墳　墓 | 7 | 4 | 1 | 12 |
| 狩猟場 | 20 | 4 | 1 | 25 |
| 集落跡 | 17 | 3 | 0 | 20 |
| 貝　塚 | 5 | 0 | 0 | 5 |
| 埋没地点 | 2 | 1 | 0 | 2 |
| 環　壕 | 1 | 0 | 0 | 1 |

表4　苫東遺跡群時代区分一覧

重複有り

| 時代＼市・町 | 苫小牧市 | 厚真町 | 早来町 | 合　計 |
|---|---|---|---|---|
| 旧石器 | 2 | 0 | 1 | 3 |
| 縄　文 | 77 | 15 | 13 | 105 |
| 続縄文 | 18 | 7 | 2 | 27 |
| 擦　文 | 7 | 4 | 1 | 12 |
| アイヌ | 6 | 0 | 0 | 6 |
| 近・現代 | 2 | 0 | 0 | 2 |
| 不　明 | 8 | 0 | 2 | 10 |
| 計 | 120 | 26 | 18 | 164 |

表5　調査班体制の変遷

(人)

| 職種＼年度 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 班　長 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 10 |
| 調査員 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 30 |
| 補助員 | 10 | 14 | 14 | 24 | 16 | 31 | 38 | 18 | 16 | 5 | 186 |
| 事務員 | 1 | 1 | 2 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 12 |
| 合　計 | 15 | 19 | 20 | 30 | 21 | 36 | 43 | 23 | 21 | 10 | 238 |

図3　苫東遺跡群の遺跡位置

表6　苫東遺跡群一覧 (1)

| No. | 遺跡名 | 種別 | 所在地 | 発見年 | 調査年 | 面積(㎡) | 時期 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 柏原1 | 遺物包含地 | 苫小牧市 | S48 | | 3,330 | 縄文 |
| 2 | 柏原2 | 〃 | 〃 | 〃 | | 6,380 | 縄文 |
| 3 | 柏原3 | 〃 | 〃 | 〃 | | 5,530 | 縄文 |
| 4 | 柏原4 | 墳墓・狩猟場 | 〃 | 〃 | S63 | 28,000 | 縄文・続縄文 |
| 5 | 柏原5 | 集落跡・墳墓 | 〃 | 〃 | H3・4・5 | 48,000 | 縄文・続縄文・擦文 |
| 6 | 柏原6 | 遺物包含地 | 〃 | 〃 | | 3,560 | 縄文？ |
| 7 | 柏原7 | 〃 | 〃 | 〃 | | 1,040 | 縄文？ |
| 8 | 柏原8 | 〃 | 〃 | S49 | | 15,590 | 縄文・続縄文 |
| 9 | 柏原9 | 〃 | 〃 | 〃 | | 950 | 縄文 |
| 10 | 柏原10 | 〃 | 〃 | 〃 | | 3,030 | 縄文 |
| 11 | 中沢 | 〃 | 〃 | — | | 3,000 | 縄文 |
| 12 | 柏原12 | 〃 | 〃 | S49 | | 5,920 | 縄文 |
| 13 | 柏原13 | 〃 | 〃 | 〃 | | 8,240 | 縄文 |
| 14 | 柏原14 | 貝塚 | 〃 | 〃 | | 11,937 | 縄文 |
| 15 | 柏原15 | 遺物包含地 | 〃 | S54 | | 7,715 | アイヌ？ |
| 16 | 柏原16 | 墳墓・狩猟場 | 〃 | S55 | S55 | 3,778 | 縄文・続縄文 |
| 17 | 柏原17 | 集落跡 | 〃 | 〃 | S57 | 5,007 | 縄文 |
| 18 | 柏原18 | 集落跡・墳墓 | 〃 | 〃 | S55 | 4,904 | 縄文・続縄文・擦文 |
| 19 | 柏原19 | 狩猟場 | 〃 | 〃 | S55 | 2,125 | 縄文 |
| 20 | 柏原20 | 遺物包含地 | 〃 | S56 | | 2,000 | 縄文？ |
| 21 | 柏原21 | 〃 | 〃 | 〃 | | 2,800 | 縄文？ |
| 22 | 柏原22 | 〃 | 〃 | S58 | | 7,733 | 縄文 |
| 23 | 柏原23 | 〃 | 〃 | 〃 | | 4,200 | 縄文 |
| 24 | 柏原26 | 〃 | 〃 | S63 | | 15,250 | 縄文 |
| 25 | 柏原27 | 狩猟場 | 〃 | H2 | H3・6 | 1,800 | 縄文 |
| 26 | 沼ノ端 | 遺物包含地 | 〃 | S41 | | | 縄文 |
| 27 | 田安平川丸木舟 | 埋没地点 | 〃 | S56 | S56 | | アイヌ |
| 28 | 柏原丸木舟 | 埋没地点 | 〃 | S44 | S44 | | アイヌ |
| 29 | 弁天貝塚 | 貝塚 | 〃 | S60 | S61・62・63 | 2,000 | アイヌ |
| 30 | 勝川1 | 遺物包含地 | 〃 | S48 | S51 | 963 | 縄文 |
| 31 | 勝川2 | 〃 | 〃 | 〃 | | 15,190 | 縄文 |
| 32 | 勝川3 | 〃 | 〃 | 〃 | | 5,130 | 縄文 |
| 33 | 勝川4 | 狩猟場 | 〃 | 〃 | S54 | 7,680 | 縄文 |
| 34 | 勝川5 | 集落跡・墳墓 | 〃 | S50 | S59・H6・7 | 8,810 | 旧石器・縄文 |
| 35 | 勝川6 | 集落跡・狩猟場 | 〃 | 〃 | S59・H6 | 8,570 | 縄文・続縄文 |
| 36 | 勝川7 | 遺物包含地 | 〃 | S53 | | 7,550 | 縄文 |
| 37 | 勝川8 | 集落跡・墳墓 | 〃 | S54 | S54 | 18,110 | 縄文 |
| 38 | 勝川9 | 狩猟場 | 〃 | 〃 | S59・H2 | 10,060 | 縄文・続縄文 |
| 39 | 勝川10 | 遺物包含地 | 〃 | 〃 | | 1,223 | 縄文 |
| 40 | 勝川11 | 〃 | 〃 | S55 | | 6,243 | 縄文 |
| 41 | 勝川12 | 〃 | 〃 | 〃 | | 1,518 | 縄文 |
| 42 | 勝川13 | 〃 | 〃 | 〃 | | 8,155 | 縄文 |
| 43 | 勝川14 | 集落跡・狩猟場 | 〃 | 〃 | S56 | 21,420 | 旧石器・縄文 |
| 44 | 勝川15 | 遺物包含地 | 〃 | 〃 | 〃 | 2,187 | 縄文 |
| 45 | 勝川 | 環壕・集落跡 | 〃 | 〃 | S57 | 18,234 | 縄文・続縄文・擦文 |
| 46 | 勝川17 | 遺物包含地 | 〃 | 〃 | S56 | 750 | 縄文・続縄文 |
| 47 | 勝川18 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 2,144 | 縄文 |
| 48 | 勝川19 | 狩猟場 | 〃 | 〃 | S55 | 2,974 | 縄文・続縄文 |
| 49 | 勝川20 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 2,687 | 縄文・続縄文 |
| 50 | 勝川21 | 集落跡・狩猟場 | 〃 | 〃 | 〃 | 2,544 | 縄文 |
| 51 | 勝川22 | 集落跡・貝塚 | 〃 | 〃 | S56・57 | 13,064 | 縄文・続縄文・アイヌ |
| 52 | 勝川23 | 遺物包含地 | 〃 | 〃 | S56 | 2,770 | 縄文・続縄文 |
| 53 | 勝川24 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 2,562 | 縄文・続縄文 |
| 54 | 勝川25 | 集落跡・狩猟場 | 〃 | 〃 | 〃 | 8,174 | 縄文・続縄文 |
| 55 | 勝川26 | 〃 | 〃 | 〃 | S55 | 2,259 | 縄文・続縄文・擦文 |
| 56 | 勝川27 | 遺物包含地 | 〃 | S57 | | 9,000 | 縄文 |
| 57 | 勝川28 | 〃 | 〃 | 〃 | | 3,200 | |
| 58 | 勝川29 | 集落跡・狩猟場 | 〃 | S59 | S59 | 1,938 | 縄文 |
| 59 | 勝川30 | 集落跡・狩猟場 | 〃 | 〃 | 〃 | 9,375 | 縄文 |

表7　苫東遺跡群一覧 (2)

| No. | 遺跡名 | 種別 | 所在地 | 発見年 | 調査年 | 面積(㎡) | 時期 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 60 | 勝川31 | 狩猟場 | 苫小牧市 | S59 | S59 | 1,094 | 縄文 |
| 61 | 勝川32 | 遺物包含地 | 〃 | 〃 | 〃 | 750 | |
| 62 | 勝川33 | 狩猟場 | 〃 | 〃 | 〃 | 3,375 | 縄文 |
| 63 | 勝川34 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 5,245 | 縄文 |
| 64 | 勝川35 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 3,281 | 縄文・アイヌ |
| 65 | 勝川36 | 〃 | 〃 | S61 | | 14,630 | 縄文 |
| 66 | 勝川37 | 集落跡 | 〃 | S61 | H1・2・3 | 5,900 | 縄文・続縄文 |
| 67 | 勝川38 | 遺物包含地 | 〃 | H1 | | 720 | 縄文 |
| 68 | 柳舟 | 集落跡・貝塚 | 〃 | S36 | S36・45 | 27,812 | 縄文 |
| 69 | 網木 | 墳墓 | 〃 | S43 | S46 | 5,120 | 縄文 |
| 70 | 亀谷 | 遺物包含地 | 〃 | S32 | | 14,390 | 縄文・続縄文・擦文 |
| 71 | ニナルカ | 集落跡・貝塚 | 〃 | — | S58・59・H5・6 | 13,550 | 縄文・続縄文・擦文 |
| 72 | 亀ケ森1 | 遺物包含地 | 〃 | S55 | | 6,637 | |
| 73 | 亀ケ森2 | 〃 | 〃 | 〃 | | 7,030 | |
| 74 | 亀ケ森3 | 〃 | 〃 | 〃 | | 2,587 | |
| 75 | 高安 | 〃 | 〃 | 〃 | | 2,530 | 縄文 |
| 76 | 奥井西1 | 〃 | 〃 | 〃 | | 900 | 縄文 |
| 77 | 奥井西2 | 〃 | 〃 | 〃 | | 900 | 縄文 |
| 78 | 奥井西3 | 〃 | 〃 | 〃 | | 618 | 縄文 |
| 79 | 山岸 | 〃 | 〃 | 〃 | | 3,655 | 縄文 |
| 80 | 山岸2 | 〃 | 〃 | H10 | | 12,000 | |
| 81 | 佐伯 | 〃 | 〃 | S55 | | 19,628 | 縄文 |
| 82 | 安藤沼1 | 〃 | 〃 | 〃 | | 7,762 | 縄文 |
| 83 | 安藤沼2 | 〃 | 〃 | 〃 | | 11,700 | 縄文・擦文 |
| 84 | 安藤沼3 | 〃 | 〃 | 〃 | | 2,700 | 縄文 |
| 85 | 矢幅 | 〃 | 〃 | 〃 | | 7,818 | 縄文 |
| 86 | 吉田 | 〃 | 〃 | 〃 | | 1,440 | 縄文 |
| 87 | 吉田2 | 〃 | 〃 | 〃 | | 3,960 | |
| 88 | 吉田3 | 〃 | 〃 | H10 | | 9,000 | |
| 89 | 長横 | 〃 | 〃 | S55 | | 2,416 | 縄文 |
| 90 | 遠浅1 | 墳墓・狩猟場 | 早来町 | S50 | S53 | 4,243 | 縄文 |
| 91 | 遠浅2 | 遺物包含地 | 〃 | 〃 | | 14,437 | 縄文 |
| 92 | 遠浅3 | 〃 | 〃 | S53 | | 3,000 | 縄文 |
| 93 | 遠浅4 | 〃 | 〃 | 〃 | | 3,062 | 縄文・続縄文 |
| 94 | 遠浅5 | 〃 | 〃 | S62 | | 16 | 縄文 |
| 95 | 源武1 | 〃 | 〃 | S54 | | 7,500 | 縄文 |
| 96 | 源武2 | 〃 | 〃 | S55 | | 6,242 | 縄文・擦文 |
| 97 | 源武3 | 〃 | 〃 | 〃 | | 3,037 | 縄文 |
| 98 | 源武4 | 〃 | 〃 | 〃 | | 13,950 | 縄文 |
| 99 | 源武5 | 〃 | 〃 | 〃 | | 7,873 | 縄文・続縄文 |
| 100 | 源武6 | 〃 | 〃 | 〃 | | 2,530 | 縄文 |
| 101 | 源武7 | 〃 | 〃 | 〃 | | 2,755 | |
| 102 | 源武8 | 〃 | 〃 | 〃 | | 4,500 | 縄文 |
| 103 | 源武9 | 〃 | 〃 | 〃 | | 7,200 | 縄文 |
| 104 | 源武10 | 〃 | 〃 | 〃 | | 505 | |
| 105 | 源武11 | 〃 | 〃 | H10 | | 41,000 | 縄文 |
| 106 | 厚真1 | 集落跡・狩猟場 | 厚真町 | S48 | S51 | 5,208 | 縄文 |
| 107 | 厚真2 | 狩猟場 | 〃 | 〃 | S52 | 3,241 | 縄文 |
| 108 | 厚真3 | 〃 | 〃 | 〃 | S53 | 6,366 | 縄文・続縄文・擦文 |
| 109 | 厚真4 | 遺物包含地 | 〃 | 〃 | | 13,453 | 縄文 |
| 110 | 厚真5 | 〃 | 〃 | 〃 | | 62,559 | 縄文・続縄文 |
| 111 | 共和 | 墳墓 | 〃 | — | S53 | 5,711 | 縄文・続縄文・擦文 |
| 112 | 厚真7 | 集落跡・墳墓 | 〃 | S48 | S52・53 | 7,185 | 縄文・続縄文 |
| 113 | 厚真8 | 〃 | 〃 | 〃 | S52 | 6,829 | 縄文・続縄文 |
| 114 | 厚真9 | 遺物包含地 | 〃 | 〃 | | 510 | 縄文 |
| 115 | 厚真10 | 〃 | 〃 | 〃 | S52 | 2,707 | 縄文 |
| 116 | 厚真11 | 〃 | 〃 | S49 | | 6,187 | 縄文 |
| 117 | 厚真12 | 墳墓 | 〃 | S53 | S54 | 13,124 | 縄文・続縄文・擦文 |
| 118 | 厚真13 | 狩猟場 | 〃 | S55 | S55 | 3,200 | 縄文・続縄文・擦文 |
| 119 | 浜厚真 | 遺物包含地 | 〃 | — | | | |

表8　苫東埋文調査の順末（1）

| 西暦 | 和暦 | 動向 | 調査 | 報告書 | 人事 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1973 | 昭和48年 | 7月 苫小牧東部工業地帯埋蔵文化財分布調査班発足 | 8月 分布調査開始 | | 7月 嘱託職員を2名採用 |
| 1974 | 昭和49年 | | 「開拓使美々鹿肉缶詰所跡」調査 5/24～6/28<br>「堰真地開拓移住跡士の墓跡」調査 11/15～11/30 | | |
| 1975 | 昭和50年 | | 千歳市美々貝塚 8/11～8/26 | 3月『苫小牧市美々「開拓使美々鹿肉缶詰製造所址」発掘調査報告書』42p | |
| 1976 | 昭和51年 | 9月 苫小牧東部工業地帯埋蔵文化財発掘調査班に改称<br>9月 苫小牧東部工業地帯埋蔵文化財遺跡協議会設置 | 静川1遺跡 9/1～9/22<br>厚真1遺跡 9/13～11/19 | 3月『堰真地開拓移住跡士の墓発掘調査報告書』75p<br>3月『植苗貝塚』56p | 9月 嘱託職員1名、臨時職員2名採用 |
| 1977 | 昭和52年 | | 厚真2・7・8・10遺跡 5/6～10/13<br>植苗久米井遺跡 7/19～7/31 | | 4月 臨時職員を3名採用 |
| 1978 | 昭和53年 | | 遠浅1遺跡 5/10～7/17<br>共和遺跡 8/1～10/24<br>厚真3・7・10遺跡 5/11～11/11<br>早来町遠浅・厚真町共和地区静川台地南端部範囲確認調査<br>追分町豊栄1遺跡 10/14～10/16 | 3月『植苗久米井遺跡発掘調査報告書』126p | 5月 工藤　肇　日本考古学協会会員 |
| 1979 | 昭和54年 | | 第1次石油備蓄基地分布調査 4/23～5/12<br>第1次北電送電線分布調査 6/12～7/26<br>静川4・8遺跡 4/29～9/8<br>厚真3・12遺跡 8/23～10/31 | 3月『苫小牧市静川調木遺跡発掘調査報告書』51p | |
| 1980 | 昭和55年 | | 厚真13遺跡 5/16～6/20<br>柏原18遺跡 6/16～9/8<br>柏原16遺跡 8/6～9/30<br>柏原19遺跡 5/13～5/15<br>静川19～21・26遺跡 9/19～11/19 | 3月『追分町の埋蔵文化財』110p | 5月 宮矢靖夫・渡辺俊一　日本考古学協会会員 |
| 1981 | 昭和56年 | 4月 苫小牧市埋蔵文化財センターに改称 | 旧安平川丸木舟 3/28～3/30<br>追分町中安平遺跡 4/30～5/2<br>静川14・15・17・18・22～25遺跡 5/6～11/21 | | |

表9　苫東埋文調査の顛末（2）

| 西暦 | 和暦 | 動向 | 調査 | 報告書 | 人事 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1982 | 昭和57年 | | 柏原17遺跡　5/10～6/16<br>静川16・22遺跡　5/10～10/25 | | 4月市職員を3名採用 |
| 1983 | 昭和58年 | | ニナルカ遺跡　5/23～6/23<br>静川9遺跡　6/15～7/14<br>タプコプ遺跡　8/1～10/29 | 3月『静川遺跡－縄文時代の環壕と集落』70p<br>3月『追分町中安平遺跡発掘調査報告書』60p | |
| 1984 | 昭和59年 | 9月 環壕問題検討専門家会議設置 | ニナルカ遺跡　5/11～5/31<br>静川5・6遺跡　5/19～10/<br>静川29～35遺跡　6/16～11/13 | 3月『タプコプ』336p | |
| 1985 | 昭和60年 | 4月 苫小牧市埋蔵文化財調査センター開所<br>11月 苫小牧市博物館開館 | ウエンナイ2遺跡　1/23～2/2 | 3月『ニナルカ』182p<br>3月『ウエンナイ2遺跡』12p | |
| 1986 | 昭和61年 | | 静川16遺跡史跡指定範囲確認調査　5/12～6/3<br>柏原24遺跡　6/24～7/27<br>弁天貝塚　7/29～8/7 | 3月『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅰ』250p<br>8月『静川16遺跡発掘調査報告書』38p<br>12月『柏原24遺跡』137p | |
| 1987 | 昭和62年 | 1月 静川16遺跡「静川遺跡」として国指定史跡となる<br>5月 全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会設立 | 弁天貝塚　7/29～8/25<br>三石町ショップ遺跡　9/22～10/25 | 3月『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅱ』479p<br>3月『弁天貝塚Ⅰ』121p | |
| 1988 | 昭和63年 | | 弁天貝塚　7/29～8/10<br>柏原4遺跡　8/20～10/28<br>虻田町入江遺跡　10/31～11/3 | 3月『弁天貝塚Ⅱ』96p<br>3月『ショップ遺跡』190p | |
| 1989 | 昭和64年 | | 虻田町入江遺跡　9/16～10/2<br>静川37遺跡　10/11～11/10 | 3月『柏原4遺跡』148p<br>3月『弁天貝塚Ⅲ』175p | |
| 1990 | 平成2年 | | 静川9遺跡　5/10～8/18<br>静川37遺跡　9/11～10/24<br>高丘E遺跡　10/12～10/25 | 3月『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅲ』489p<br>3月『入江遺跡』140p<br>12月『高丘E遺跡』26p | |
| 1991 | 平成3年 | | 美沢11遺跡　6/7～8/31<br>柏原5遺跡　6/14～10/8<br>静川37遺跡　9/1～10/31<br>柏原27遺跡　10/9～11/16 | 3月『静川9遺跡』77p | 5月 赤石慎三・二階堂晋出日本考古学協会会員 |
| 1992 | 平成4年 | | 柏原5遺跡　5/12～11/14<br>美沢11遺跡　5/15～10/29 | 1月『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅳ』369p<br>3月『静川37遺跡』146p | 4月 市職員2名を採用<br>5月 兵藤千秋・大泉博嗣日本考古学協会会員 |

表10　苫東埋文調査の顛末（3）

| 西暦 | 和暦 | 動向 | 調査 | 報告書 | 人事 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1993 | 平成5年 | 9月 全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会役員会開催 | 柏原5遺跡 5/7～10/28<br>ニナルカ遺跡 5/11～11/2<br>美沢東4・5・6遺跡 5/11～10/29 | 3月『美沢11遺跡』196p | 4月 市職員3名を採用 |
| 1994 | 平成6年 | | 柏原27遺跡 6/14～7/29<br>ニナルカ遺跡 6/14～8/12<br>静川5・6遺跡 8/17～10/22<br>美沢10遺跡 8/2～10/28<br>美沢東6遺跡 8/2～11/2<br>追分町ポンアピラ2遺跡 10/18～10/23 | | |
| 1995 | 平成7年 | | 美沢東6遺跡 5/19～10/28<br>美沢10遺跡 5/24～10/13<br>静川5遺跡 5/26～10/19 | 1月『ポンアピラ2遺跡』50p<br>11月『苫小牧東部工業地帯の遺跡群V』462p | |
| 1996 | 平成8年 | | 美沢東6遺跡 5/17～9/28<br>美沢10遺跡 5/24～7/30<br>厚岸市ニカンボシ10遺跡 8/1～10/31 | | |
| 1997 | 平成9年 | | 白老町虎杖浜2遺跡 5/7～10/29 | 3月『柏原5遺跡』691p<br>3月『ニカンボシ10遺跡』93p<br>9月『美沢10遺跡』120p | |
| 1998 | 平成10年 | 苫小牧東部開発（株）破綻 | 白老町ポンアヨロ4遺跡 5/6～10/30<br>えりも町油駒遺跡 9/1～10/31 | 3月『柏原27・ニナルカ・静川5・6遺跡』530p<br>9月『美沢東遺跡群』268p | 4月 科学センター、国保醫、中央図書館へそれぞれ1名が異動 |
| 1999 | 平成11年 | 5月 全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会解散 | えりも町油駒遺跡 5/7～10/8 | 9月『虎杖浜2・ポンアヨロ4遺跡』244p | |
| 2000 | 平成12年 | | 鵡川町米原3遺跡 5/14～6/12 | 3月『油駒遺跡』176p<br>9月『米原3遺跡』53p | |
| 2001 | 平成13年 | 文化庁文化財補助事業による報告書作成<br>労働省緊急地域雇用特別対策推進事業による整理 | | | 3月 佐藤一夫　定年退職 |
| 2002 | 平成14年 | 4月 苫小牧市埋蔵文化財調査センター業務縮小 | | 3月『苫小牧東部工業地帯の遺跡群VI』411p<br>『苫小牧東部工業地帯の遺跡群VII』401p<br>『苫小牧東部工業地帯の遺跡群VIII』482p<br>『苫小牧東部工業地帯の遺跡群IX』831p<br>『苫小牧東部工業地帯の遺跡群X』181p | 3月 宮夫博夫　定年退職<br>4月 中央図書館、博物館、総合体育館へそれぞれ1名が異動 |

表11　苫東埋文調査の経費

（円）

| 年度 | 種別 ＼ 原因者 | 苫東KK | 開発 | 調査遺跡 |
|---|---|---|---|---|
| 48 | 分布調査 | 12,369,000 | | |
| 49 | 〃 | 12,360,415 | | |
| 50 | 〃 | 15,399,949 | | |
| 51 | 発掘調査 | 12,467,000 | | S-1　A-1 |
| 52 | 〃 | 28,781,000 | | A-2.7.8.10 |
| 53 | 〃 | 35,436,266 | | T-1　A-3.7.10<br>共和 |
| 54 | 〃 | 20,051,387 | | S-8　A-3.12 |
| 55 | 〃 | 21,756,540 | | A-13　K-16.18<br>A-9～21.26 |
| 56 | 〃 | 20,633,753 | | S-14.15.17.18<br>22～25 |
| 57 | 〃 | 22,369,482 | | K17.S-16.22 |
| 58 | 〃 | 22,499,254 | 64,746,689 | S-9<br>ニナルカ.タプコプ |
| 59 | 〃 | 20,656,000 | 63,820,000 | S-5.6.29～35<br>ニナルカ |
| 60 | 〃 | 18,760,000 | | |
| 61 | 〃 | 21,098,000 | 6,597,000 | S-16<br>K-24 |
| 62 | 〃 | 21,190,000 | | |
| 63 | 〃 | 21,522,000 | | |
| H1 | 〃 | 36,709,886 | | S-37 |
| H2 | 〃 | 11,985,984 | | S-9.37 |
| H3 | 〃 | | 236,383,733 | K-5.27<br>M-11　S-37 |
| H4 | 〃 | | 203,808,315 | K-5　ニナルカ<br>M-11 |
| H5 | 〃 | | 503,370,152 | K-5　ニナルカ<br>ME-4～6 |
| 合計 | | 376,045,916 | 1,078,725,889 | |

M＝美沢　A＝厚真　S＝静川
ME＝美沢東　T＝遠浅　K＝柏原

## 馬追丘陵における1960年前後の遺跡調査ー戦後北海道考古学史の一断面ー

野村　崇
（元北海道開拓記念館学芸部長）

### a　私の考古遍歴

・自己紹介にかえて

### b　1955年～1965年前後までの馬追丘陵周辺の主要調査概要

#### (1) 長沼町タンネトウ遺跡

夕張郡長沼町幌内2274－１他（長浜洋一氏他）

1957（昭和32）年……第１次調査（分布調査）

1958（昭和33）年……第２次調査（Ａ地区、Ｂ地区・名取武光氏担当）

1961（昭和36）年……第３次調査（Ｂ発掘区、吉崎昌一氏担当）

Ａ発掘区　発掘面積27m²、縄文晩期、タンネトウＬ式

Ｂ発掘区　発掘面積16m²、縄文早期、タンネトウＥ式

**遺跡の概要**

長沼町の東部に横たわる馬追丘陵の西斜面、幌内18区の海抜40～68mの中位段丘上に、約２万m²にわたってひろがる。発掘調査は1957・58・61年（昭和32・33・36）の３回にわたり、札幌西高校郷土研究部により行れた。発掘当時、遺跡西端の高台に立てば、茫漠たる石狩低地帯が一望のもとに収めることができ、今は干拓によって失われた馬追沼・長都沼を見ることができた。

発掘地点はＡ・Ｂの２発掘区に分かれ、両者は約40m離れている。Ａ区からは、晩期終末の大洞Ａ式に比定できるタンネトウＬ式土器が出土し、Ｂ区からは早期の東釧路Ⅲ式に比定できるタンネトウＥ式土器が検出された。本遺跡の調査は、石狩低地帯の縄文早期および晩期編年において、新型式を設定しただけでなく、とりわけ晩期のタンネトウＬ式土器の設定と細分化は、亀ヶ岡式系土器群分布圏周縁における「非大洞系土器群」を分ける上で重要な役割を果たした。

＊野村崇『長沼町タンネトウ遺跡の調査』1977、空知地方史研究協議会。

#### (2) 長沼町堂林遺跡

夕張郡長沼町幌内2008他（堂林克美氏他）

1960（昭和35）年４月、９月　長沼町教育委員会主催（吉崎昌一氏担当）

Ａ～Ｄ地区　66m²を発掘、縄文時代後期末葉

**遺跡の概要**

本遺跡の調査は、昭和35年４月１日から５日までと、同年９月１日から10日までの２回にわたって、長沼町教育委員会のもとに、吉崎昌一氏が担当者となって実施したものである。発掘の主体は、札幌西高等学校郷土研究部OB会があたり、昭和42年３月に報告書が刊行されている。

発掘によって出土した土器は、第１群土器とした土器と、斜行縄文あるいは羽状縄文を地文とし、口縁部に内側から外に突いて、表面に小さな瘤を作る土器と、第２群土器とした地文の縄文の上に沈線文、渦巻文、曲線文などの文様が描かれる精製土器からなりたっている。

石器は、有茎の石鏃、石斧、石槍、異形石器、石棒の頭部などがあり、また拳大の黒曜石原石を５個積み上げた遺構などが検出されている。

本遺跡出土の一括土器をもとにして、「堂林式土器」が設定された。所属時代は、縄文時代後期の手稲式および、これに後続するエリモ遺跡B地点出土の土器と、御殿山式土器の間を埋めるものとして、縄文時代後期終末に位置づけた。

＊野村　崇・宇田川洋「長沼町幌内堂林遺跡調査報告」長沼町教育委員会、昭和42年3月。

(3) 栗山町鳩山第3遺跡

夕張郡栗山町字湯地48－6（蓑口寿宅氏）

1963（昭和38）年7月、夕張東高校・札幌西高校郷土研究部

縄文時代晩期末葉

**遺跡の概要**

本遺跡は、夕張川の支流の一つであるポンウェンベツ川に向かって張り出した舌状台地の南斜面に立地する。発掘調査は、昭和38年7月25日から31日まで夕張東高校・札幌西高校の各郷土研究部、栗山町社会科サークルの三者が共催となり、藤本英夫氏の担当のもとに実施したものである＊。発掘地点は松林の樹間になっているため、1m×1m単位の発掘溝を合計13m²にわたって発掘した。表土をはぎ、黄褐色土を15cmほど剝離したところ、円形の掘り返しが認められ、さらに掘り進めると、赤褐色土層の下部から粘土層にかけて、長軸1m、短軸80cmの楕円形ピットの掘り込みが明瞭に確認できた。積石はなく、拳大の石が数個不規則にあっただけで意識的な配石はなかった。ピットの上部には、土器破片が、かためて置かれたかのように多量に検出された。ピットの底面からは、無茎の石鏃が40本と石斧、スクレイパー、砥石、軽石製の有溝研磨器、黒曜石の原石、それと人骨片などが出土した。ピットの底面で火を燃やしたのか、底面は移植べらでたたくと音がするほどであった。また底面出土の遺物は、いずれも焼けていた。土器は土壙の底面およびその付近から完形になるもの4個、破片にして4,143点を数える。これらの破片のなかには、硬化した工字文をもつ精製の大洞系土器があり、タンネトウL式土器に後続する縄文晩期終末の時期の所産である。

＊野村　崇「北海道栗山町鳩山の墳墓遺跡」『石器時代』7所収、昭和40年10月

(4) 由仁町東三川遺跡

夕張郡由仁町字三川298番地（加藤龍雄氏）

1964（昭和39）年11月　　第1次調査

1965（昭和40）年10月　　第2次調査

1966（昭和41）年10月　　第3次調査

発掘総面積76m²、縄文時代後期末～晩期初頭の土壙墓、遺物包含層

**遺跡の概要**

夕張川が滝ノ下から流路を北にとると、夕張山地と西の馬追丘陵との間にやや開けた盆地性の平野が広がる。本遺跡は、この小盆地のなかを北流する夕張川の西岸、馬追丘陵から続く丘陵東斜面に立地している。海抜高度は73mである。

遺跡の背後には、比高8mほどの段丘崖があり、その崖下に豊富で良質な湧水が湧き出し、地主の加藤家の飲料水となっていたが、現在は涸れている。

本遺跡が知られたのは、1963（昭和38）年9月に行った野村らの遺跡分布調査の際に、東三川小学校に寄贈された本遺跡出土の土器に注意して以来である。

由仁町教育委員会では、1964（昭和39）年11月2日、3日の第1次調査、1965（昭和40）年10月9

日、10日の第２次調査、1966（昭和41）年10月８日～10日の第３次調査と、３ヵ年間にわたって継続し、合計76m²の面積を発掘した。遺構は、墓壙と考えられる直径80cm前後のピットが２基検出された。本遺跡の主体となる土器は、地文の縄文が付された上に、裏から棒で突いて作る突瘤文、爪形文、刺突文などのつけられた深鉢形土器と、浅鉢、壺、注口などに施文された各種の渦巻文、沈線文、曲線文それに彫去された三叉文などが伴う。そのほかに、滑車形耳飾などの土製品もある。

石器としては、石鏃、石小刀、石槍、削器、掻器、石斧などが出土した。本遺跡は、出土した土器からみて、彫去された三叉文のあることなどから、大洞Ｂ式土器に比定し、縄文時代晩期の最初頭の時期とした。

＊野村　崇「由仁町東三川遺跡」『北海道由仁町の先史遺跡』所収、由仁町教育委員会　昭和44年３月

**(5) 由仁町岩内遺跡**

夕張郡由仁町字岩内501－８、(石川博継氏)

1966（昭和41）年７月　第１次調査

1967（昭和42）年８月　第２次調査

擦文時代初頭　竪穴住居跡、２軒、発掘面積約120m²

**遺跡の概要**

本遺跡は、夕張川が滝ノ下付近から流路を北にかえて、馬追丘陵の中央東側に流下するあたり、すなわち、国鉄室蘭本線古山駅より東北東に約４km行った河岸段丘（海抜48m）上に立地する。本遺跡は、雑木林のなかにある地表面のくぼんだ三軒の竪穴住居址であり、地主の石川幸太郎氏によって永年保存されてきたが、川端ダムの完成により水田化がすすみ、本遺跡のすぐ背後までせせまってきた。また、溜池工事造成の際に１号住居址の約2/3が削られたという事態もあって、由仁町教育委員会では２ヵ年計画で１号および２号住居址の発掘調査と地形実測図等の作成を計画し、３号住居址の永久保存をはかることとした。

発掘調査は、由仁町教育委員会が主催し、野村崇が発掘担当者となり、夕張東高校・札幌西高校郷土研究部・北海道教育大学の生徒・学生の参加により、第１次調査は、1966（昭和41）年７月25日から27日まで、第２次調査は、1967（昭和42）年８月17日～21日までの２回にわたって実施された。その結果については、すでに報告されているので、ここではその概要のみを記す。

**１号住居址**

雑木林内に、南北に一列に並ぶ住居址群中、一番北に位置するものである。発掘前に土砂採取のため、半分近くがこわされていた。完掘後の北東―南西を指す南東壁の長さは5.6mを測り、住居址最大長は中央部で６m弱である。カマドは南東壁の中央よりやや北東寄りに残存していた。構造は南西側に白色粘土、北東側に自然石を用い、煙道は壁に穿っていない造りつけの一形式をとっている。柱穴様のピットは３個認められた。

本住居址から出土した遺物は、坏形土器と小形の鉢形土器、1/3が欠けた土製紡錘車である。他に腐蝕の進んだ鉄器片が出ている。

**２号住居址**

完掘後の大きさは、北東―南西をさす北西壁の長さが4.4m、北東壁は４mあり、隅丸方形である。壁の高さは30～50cmである。カマドは、南東壁の中央より南寄りに残存していた。構造は石組であったと考えられるが、解体されて焚口付近や住居址南隅にあった。煙道は、南方向に向いている。その長さは、ほぼ100cmであった。柱穴と考えられるピットは５本検出された。住居址の東西南北のコーナー

寄りと中心部の５本である。

出土遺物は５点の坏形土器と胴部以下が欠損した甕形土器、小形土器の底部などである。また壺形土器が１号址のカマドより南東へ約２ｍのところの旧地表面と考えられるところから一括発見された。

本遺跡出土の遺物は、１号および２号住居址とともに、坏形土器の胴の中位に１条の段を有する点や壺形土器の肩部にも明瞭な段をもつ点などから考えて、東北地方の桜井第１型式に対比できるおよそ８世紀頃の土師器の一群と考えてよいであろう。

＊宇田川洋「由仁町岩内遺跡」『北海道由仁町の先史遺跡』所収、由仁町教育委員会、昭和44年３月

## c　総括

・1960年前後の北海道考古学界

・馬追丘陵遺跡群調査の果たした役割

・まとめに代えて

由仁町　東三川遺跡にて

由仁町　岩内遺跡

長沼町　幌内神社境内

長沼町　タンネトウ遺跡（左手の林に湧水がある。）

## 4　研修・研究会等

### (1) 研修・研究会等

| | |
|---|---|
| ＊平成14年度北海道文化財・埋蔵文化財担当者会議（札幌市） | 4月18日～4月19日 |
| 西田・菅野・越田（賢）・長沼・藤原 | |
| ＊日本考古学協会2002年度総会（東京）　畑 | 5月25日～5月26日 |
| ＊平成14年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会 | |
| 総会（栃木）　西田・阪口 | 6月13日～6月14日 |
| 北海道・東北ブロック会議（常呂町）　越田・阪口 | 9月11日～9月12日 |
| 北海道・東北地区コンピューター等研究委員会（山形）　西田・倉橋 | 9月26日～9月27日 |
| 北海道・東北地区会議（岩手）　西田・吉田・菅野 | 10月10日～10月11日 |
| 研修会（石川）　小鹿・小笠原 | 10月17日～10月18日 |
| 役員会（東京）　宮崎・吉田 | 11月18日～11月19日 |
| 海外研修（中国）　畑・皆川・村田 | 11月26日～12月3日 |
| ＊「埋蔵文化財写真技術研究会」（奈良）　吉田 | 7月5日～7月6日 |
| ＊第5回東北保存科学研究会（福島）　田口 | 7月20日～7月21日 |
| ＊日本第四紀学会2002年大会（長野）　花岡 | 8月23日～8月25日 |
| ＊平成14年度第1回埋蔵文化財担当職員等講習会（大阪）　礒田・小杉 | 9月9日～9月10日 |
| ＊平成14年度アイヌ民俗文化財専門職員等研修会（札幌市）　佐藤（剛） | 10月2日～10月4日 |
| ＊奈良文化財研究所　埋蔵文化財発掘技術者特別研修（奈良） | |
| 「測量外注管理課程」　村田 | 10月9日～10月11日 |
| 「自然科学的年代決定法課程」　直江 | 11月12日～11月15日 |
| ＊南北海道考古学情報交換会（森町） | 11月30日～12月1日 |
| 越田（賢）・柳瀬・大泰司・中山 | |
| ＊保存科学研究集会（奈良）　三浦・田口 | 12月20日 |
| ＊第16回東北日本の旧石器を語る会（山形）　長沼 | 12月21日～12月22日 |

### (2) 遺跡見学会等協力

| | |
|---|---|
| ＊平成13年度遺跡報告会（センター研修室） | 4月21日 |
| ＊白滝村白滝遺跡群遺跡見学（白滝村立上川小35名） | 6月7日 |
| ＊恵庭市西島松5遺跡体験発掘（札幌市立曙小6年36名） | 6月18日 |
| ＊根室市穂香竪穴群遺跡見学（根室市博物館開設準備室主催史跡見学会27名） | 6月23日 |
| ＊鵡川町宮戸4遺跡体験発掘（札幌市立美園小109名） | 6月26日 |
| ＊千歳市オルイカ1遺跡体験発掘（札幌市立苗穂小87名） | 7月23日 |
| ＊森町濁川左岸遺跡見学（南北海道情報交換会20名） | 7月13日 |
| ＊森町倉知川右岸遺跡体験発掘（七飯町歴史館ジュニア探検クラブ36名） | 7月26日 |
| ＊西島松5遺跡見学（北海道浅井学園大学56名） | 7月31日 |

＊オルイカ１遺跡見学（第31回北海道高等学校地理教育研究会全道研究大会）　8月２日
＊穂香竪穴群体験発掘（「チャレンジふるさと根室探検隊」）　8月９日
＊石狩市対雁２遺跡体験発掘（稚内市立上勇知中）　9月５日
＊穂香竪穴群見学（中標津町立中標津東小）　9月11日
＊穂香竪穴群見学会（根室市博物館開設準備室主催穂香竪穴群発掘見学会）　9月28日
＊穂香竪穴群見学（根室管内高等学校教育研究会）　10月17日

(3) 部内研修・報告会
＊平成14年度現地研修会（千歳市・長沼町・由仁町・恵庭市）　9月５日～9月６日
講師　佐藤一夫　勇武津資料館館長「苫東埋文調査の顛末」
野村崇　元北海道開拓記念館学芸部長「馬追丘陵における1960年前後の遺跡調査」
＊平成14年度現地調査報告会（センター研修室）　11月21日

(4) 派遣・講演依頼
＊電力活用札幌地区協議会　講演　6月６日
《講師》越田（賢）
＊第１回紋別市立博物館歴史講座「旧石器時代～白滝・紋別・北海道」　6月13日
《講師》長沼
＊札幌市教育研究協議会「夏の研究集会」　6月25日
《講師》長沼
＊保存処理指導　治村教育委員会　6月27日～6月28日
《派遣》田口
＊青森県史編さん事業「青森県史資料編古代２出土文字資料」（仮題）　カード作成依頼　鈴木（信）　7月８日
＊子ども考古調査隊　小樽市教育委員会　石器作り　8月３日
《講師》長沼
＊平成14年度第１回体験学習教室　白滝村　石器作り　8月31日
《講師》長沼
＊第５回だて噴火湾縄文まつり　縄文シンポジウム　9月７日
《派遣》畑
＊平成14年度札幌市民族教育に関する研修会（第Ⅱ期）　9月19日
《講師》越田（賢）
＊平成14年度社会科・地理歴史科教育研修講座　北海道立教育研究所　10月１日
「博物館等の活用を図る授業改善の在り方」
《講師》西田
＊酪農大学教職課程履修講義「総合演習」―オホーツク文化の探求（センター研修室）
《講師》西田　10月７日
《講師》種市　12月９日
《講師》越田（賢）　12月16日
＊第25回特別企画展「120年より前の帯広」帯広百年記念館　10月19日

《講師》越田（賢）

＊文化財講演会　白滝村　「白滝遺跡群の調査と成果について」　10月22日

《講師》長沼

＊富良野市博物館歴史講演会　「北海道の旧石器文化の研究事情」　11月10日

《講師》畑

＊遺跡学会をめざした、遺跡の保存と活用に関する研究集会（奈良）　11月21日～11月22日

《派遣》畑

(5) 研究協力

＊「発掘された日本列島展2001」「発掘された日本列島展2002」実行委員会　（東京）　3月11日

《出席》越田（賢）・愛場

＊「発掘された日本列島展2003」実行委員会　（東京）　12月9日

《出席》越田（賢）・倉橋

＊平成14年度恵庭市カリンパ3遺跡整備検討委員会委員委嘱　4月1日～平成15年3月31日

《派遣》畑　7月3日、7月10日、7月17日、11月14日

＊史跡標津遺跡群　天然記念物標津湿原整備委員会アドバイザー　5月24日～平成16年3月31日

《派遣》畑　8月27日、11月4日

＊史跡等整備調査委員会委員の就任　網走市教育委員会　6月10日～平成15年3月31日

《派遣》畑　6月25日～6月27日、10月24日

＊「北海道の文化」編集委員委嘱　北海道文化財保護協会　平成14年6月7日付

《派遣》越田（賢）　6月21日

＊「埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究」協力者会議　（東京）

《出席》長沼　5月30日～5月31日、8月27日～8月28日、11月21日～11月22日

＊共同研究員の委嘱　新潟県立歴史博物館調査研究事業　総合研究「日本古代の辺境の様相」のため　10月1日～平成15年3月31日

《派遣》中田　11月16日～11月17日

## 5　平成14年度資料の貸出

| 提供先 | 目　的 | 資料名・内容 |
|---|---|---|
| 千歳市立向陽台中学校<br>草野修 | 社会科教材 | 遺物－キウス5遺跡出土土器1ケース |
| 仙台市富沢遺跡保存館館長 | 平成14年度特別展<br>5月27日～10月11日 | 遺物－白滝遺跡群・柏台1遺跡・ユカンボシC15遺跡出土資料 |
| 朝日新聞社出版局 | 週刊朝日百科に掲載 | フィルム－白滝遺跡群航空写真ほか3点 |
| 山川出版社 | 日本史リブレットに掲載 | フィルム－柏台1遺跡出土細石刃核ほか7点 |

| 提供先 | 目　的 | 資料名・内容 |
|---|---|---|
| 白滝村教育委員会 | パンフレットに掲載 | フィルム－白滝遺跡出土石器写真９点 |
| 八雲町教育委員会 | 八雲町での展示 | フィルム－シラリカ２遺跡近景写真ほか４点 |
| 白老町仙台藩<br>白老元陣屋資料館 | 資料館報に掲載 | フィルム－虎杖浜２遺跡写真４点 |
| NHK | TV放送に使用 | フィルム－青苗砂丘遺跡遠景ほか６点 |
| 白滝村教育委員会 | 村政要覧に掲載 | フィルム－白滝遺跡出土石器写真９点 |
| 北海道映像記録 | DVDソフトに使用 | フィルム－美々４遺跡土偶ほか11点 |
| 岩波書店『科学』編集部 | 雑誌掲載 | フィルム－白滝遺跡群ほか５点 |
| 北海道考古学会会長 | ポスターなど | フィルム－ウサクマイN遺跡ほか20枚 |
| 風土文化社 | 単行本掲載 | フィルム－忍路土場遺跡１枚 |
| 仙台市富沢遺跡保存館館長 | 展示・図録掲載 | フィルム－白滝遺跡群遠景ほか７枚 |
| 北海道地域文化保存振興協会理事長 | 機関紙掲載 | フィルム－北海道埋蔵文化財センター全景ほか１枚 |
| 国立歴史民俗博物館<br>春成秀爾 | 単行本掲載 | フィルム－美沢１遺跡JX-４調査状況 |
| 大湯ストーンサークル館<br>館長 | 情報検索システム | フィルム－美沢１遺跡JX-３調査状況ほか６枚 |
| 北海道東海大学学生<br>坂本大亮 | 卒業研究（デザイン） | フィルム－美々４遺跡動物型土製品ほか17点 |
| 碧水社代表取締役<br>清水淳郎 | 単行本掲載 | フィルム－ママチ遺跡出土土製仮面１枚 |
| 講談社学芸局長<br>柳田和哉 | 単行本掲載 | フィルム－柏台１遺跡出土遺物ほか２点 |
| 山川出版社 | 単行本掲載 | フィルム－キウス４遺跡復元模型１枚 |
| 朝日新聞社編集部 | 週刊朝日百科に掲載 | フィルム－桔梗２遺跡シャチ形土製品１枚 |
| 朝日新聞社編集部 | 週刊朝日百科に掲載 | フィルム－忍路土場遺跡出土ホッケマ式土器１枚 |
| ヴュー企画<br>代表取締役柴田周作 | ビデオ解説冊子に掲載 | フィルム－キウス４遺跡復元模型ほか２枚 |
| 碧水社代表取締役<br>清水淳郎 | 単行本掲載 | フィルム－美々４遺跡出土ヒスイネックレスほか２枚 |
| 毎日新聞報道部江別<br>吉田　巍 | 新聞掲載 | フィルム－青苗砂丘遺跡人骨出土状況ほか |
| 北海道新聞社出版局<br>藤崎貞信 | 単行本掲載 | フィルム－滝里33遺跡出土コハク玉１枚 |
| 北海道新聞社出版局<br>藤崎貞信 | 単行本掲載 | フィルム－忍路土場遺跡関係40枚 |
| 相模原市立博物館館長<br>安立武嘯 | リーフレットおよび解説パネル | フィルム－白滝遺跡群出土石器ほか８枚 |
| 小川忠博 | 未定 | 遺物－美々４遺跡出土小型土器ほか |

## 6　平成14年度刊行予定報告書

第178集　『恵庭市　西島松５遺跡』
柏木川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第179集　『恵庭市　西島松９遺跡』
柏木川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第180集　『千歳市　キウス４遺跡（9）』
北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書

第181集　『八雲町　落部１遺跡』
北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書

第182集　『森町　本内川右岸遺跡』
北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書

第183集　『八雲町　野田生１遺跡』
北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書

第184集　『根室市　穂香竪穴群（2）』
一般国道44号根室市根室道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第185集　『鵡川町　米原４遺跡（2）・宮戸４遺跡（2）』
日高自動車道厚真門別道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第186集　『厚真町　浜厚真３遺跡』
日高自動車道厚真門別道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第187集　『千歳市　キウス４遺跡(10)』
北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書

第188集　『千歳市　オルイカ１遺跡』
一般国道337号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第189集　『千歳市　オルイカ２遺跡』
一般国道337号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第190集　『森町　濁川左岸遺跡』
北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書

第191集　『森町　本茅部１遺跡』
北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書

第192集　『千歳市　ユカンボシＣ15遺跡（6）』
北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書

第193集　『江別市　対雁２遺跡（4）』
石狩川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

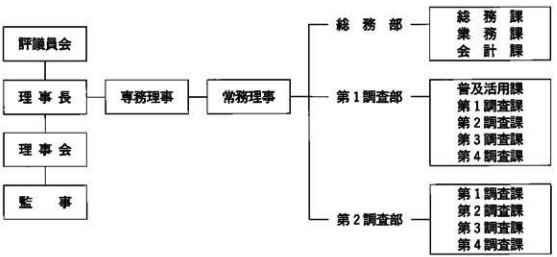
## 7　組織・機構

**役　　員**（平成14年7月1日現在）

| | | |
|---|---|---|
| 理事長 | 森重楯一 | |
| 専務理事 | 宮崎　勝 | |
| 常務理事 | 畑　宏明 | |
| 理　事 | 朝野　隆 | 北海道札幌東高等学校長 |
| 理　事 | 石林　清 | 北海道教育文化協会理事長 |
| 理　事 | 岡田宏明 | 北海道北方民族博物館長 |
| 理　事 | 菊池俊彦 | 北海道大学教授 |
| 理　事 | 北川芳男 | 日本地質学会名誉会員 |
| 理　事 | 田端　宏 | 道都大学教授 |
| 理　事 | 蜂谷光雄 | 由仁町教育委員会教育長 |
| 監　事 | 佐藤一夫 | 苫小牧市勇武津資料館長 |
| 監　事 | 村山邦彦 | 北広島市教育委員会委員長 |

**評議員**（平成14年7月1日現在）

| | | |
|---|---|---|
| 評議員 | 加藤邦雄 | 札幌市市民局生活文化部文化財課長 |
| 評議員 | 木田　勇 | 北海道教育庁生涯学習部文化課長 |
| 評議員 | 小林真人 | 財団法人北海道開拓の村学芸課長 |
| 評議員 | 昌子守彦 | 酪農学園大学教授 |
| 評議員 | 高澤正良 | 北海道教育庁生涯学習部生涯学習推進局長 |
| 評議員 | 鶴丸俊明 | 札幌学院大学助教授 |
| 評議員 | 永井秀夫 | 北海道大学名誉教授 |
| 評議員 | 西村　守 | 北海道教育庁企画総務部教育政策課長 |
| 評議員 | 山下　巌 | 岩見沢市立上幌向中学校長 |
| 評議員 | 山田和広 | 釧路市教育委員会教育長 |



## 8 職　　員（平成14年7月1日現在）

### 総務部

| | |
|---|---|
| 総務部長 | ○下村一久 |
| 総務課長 | ○阪口博治 |
| 主査 | 菅野聡 |
| 主任 | 小杉充 |
| 主任 | 小笠原学 |
| 参与 | 金谷英男 |
| 技師 | 小笠原貞夫 |
| 業務課長 | 小鹿正芳 |
| 主査 | 葛西宏昭 |
| 主任 | 中村貴志 |
| 参与 | 市原祺清 |
| 会計課長 | 吉田貴和子 |
| 主査 | 碓田千秋 |
| 主事 | 今本宏信 |

### 第1調査部

| | |
|---|---|
| 第1調査部長(兼務) | ○畑宏明 |
| 普及活用課長 | ○越田賢一郎 |
| 主査 | 藤本昌子 |
| 主査 | 皆川洋一 |
| 主任 | 倉橋直孝 |
| 主任 | ○藤原秀樹 |
| 第1調査課長 | 立川トマス |
| 主査 | 花岡正光 |
| 主査 | 田口尚 |
| 第2調査課長 | ○種市幸生 |
| 主任 | 菊池慈人 |
| 主任 | 藤井浩 |
| 主任 | 新家水奈 |
| 主任 | 坂本尚史 |
| 主任 | 福井淳一 |
| 文化財保護主事 | 柳瀬由佳 |
| 第3調査課長 | ○長沼孝 |
| 主査 | 越田雅司 |
| 主任 | 愛場和人 |
| 主任 | 鈴木宏行 |
| 主任 | 立田理 |
| 文化財保護主事 | 広田良成 |
| 文化財保護主事 | 直江康雄 |
| 第4調査課長 | 遠藤香澄 |
| 主査 | 鎌田望 |
| 主任 | ○中田裕香 |
| 主任 | 笠原興 |
| 主任 | 芝田直人 |
| 文化財保護主事 | 山中文雄 |

### 第2調査部

| | |
|---|---|
| 第2調査部長 | 西田茂 |
| 第1調査課長 | 佐藤和雄 |
| 主任 | 土肥研晶 |
| 主任 | 佐藤剛 |
| 文化財保護主事 | 石井淳平 |
| 第2調査課長 | 佐川俊一 |
| 主査 | 和泉田毅 |
| 主任 | 末光正卓 |
| 主任 | 阿部明義 |
| 主任 | 冨永勝也 |
| 第3調査課長 | 熊谷仁志 |
| 主査 | 谷島由貴 |
| 主任 | 村田大 |
| 主任 | 中山昭大 |
| 主任 | 影浦覚 |
| 主任 | 袖岡淳子 |
| 文化財保護主事 | 大泰司統 |
| 第4調査課長 | 三浦正人 |
| 主査 | 鈴木信 |
| 主任 | ○西脇対名夫 |
| 文化財保護主事 | 吉田裕吏洋 |
| 文化財保護主事 | 酒井秀治 |

○：北海道教育庁の派遣職員

**調 査 年 報 15**

平成14年度

平成15年1月28日発行

編集・発行　財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 江別市西野幌685-1
TEL 011-386-3231・FAX 011-386-3238
URL http://www.domaibun.or.jp/
E-mail mail@domaibun.or.jp

印　　刷　興国印刷株式会社
〒060-0041 札幌市中央区大通東3
TEL 011-252-2221・FAX 011-252-2229